
忍びの麻帆良生活

エルグラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍びの麻帆良生活

【Nコード】

N9587M

【作者名】

エルグラ

【あらすじ】

とある忍びが異世界に！？
しかも魔法使いの国ですと！？
これから彼はどうなるの！？

これはNARUTO世界のオリ主がネギが来る前の麻帆良へ行ってしまう物語です

設定に仙人モードの詳細を追加しました

忍びは異界へ（前書き）

始めました！

感想をお待ちしております

忍びは異界へ

「ああああああ!!」

さて、自己紹介といこう

私は森青リンジと言う木の葉の里の上忍だ

年齢は21……まあ素質は合ったからこの地位にいる訳だ
で…この私は現在、凄まじい速さで絶賛落下中だ

「何故!というか一楽でラーメン食していたのだが!」

そう私はラーメン片手に落下している

もう風圧のせいで醤油のスープが飛び散りベストはぬれ、額当てにナルトがくっついている

しかし私は虚しく落下していく…このままでは自分は盛大に地面にファーストキスを捧げる羽目になるだろう

「それは……嫌だ!」

素早く印を結びチャクラを練り上げる

呼び出すだけでけっこうチャクラを持っていかれるが仕方ない

「口寄せの術!…来てください!」

地面より残り50mと行ったところで彼は来てくれた

「なんとか…助か…うおっ…揺らさないで下さいよ…ケンさん」

呼び出したのは心優しき大ガマ…ガマケンさんです

ケンさん…もとい妙木山の方々とは変わった出会いでした

偶々山から抜け出しケガしていたガマを応急措置ですが治療したところそのお礼として招かれ契約しました

……あの虫ですが食べられるもんじゃありません

シマ様に稽古をつけて貰うため残しませんでしたが

「自分は不器用なもんで…しかし不思議なところだな」

「やっぱりケンさんもそう思いますか?」

ぐるっと見渡してみてもあるのは訳の分からない箱とやけに明るい

光……向こうにはとんでもなくデカイ木が生えている……

「自分は何十年も生きてるが……こんな景色は見たことがない……」

……5 大国以外の国でしょうか……

「取り敢えず……ケンさんあの木に行つて貰えませんか？」

指差したのは巨大な木です

「心得た……ていつ」

ケンさんはいきなり力を貯め大ジャンプをしました

「うわぁ！気を付けて下さい！」

「自分は不器用なもんで」

タカミチサイド

それはまさしく山だった

見廻りを終え帰る矢先……世界樹の前に化物のようなカエルがいた
その上には人が立っているが……おかしな事に殺気を感じないのだ
だが……けつして隙はない

まともにいけば苦戦は間違いない相手だ

その時カエルと人影がこつちに気付きいった

「……此処はどこですか？」

と……何かの冗談か？

「……ここは麻帆良だよ……君たちは？」

すると聞いた事のない答えだった

「火の国、木の葉隠れの里上忍、森青リンジと言います……此方は」

「妙木山出身……ガマケンと申します」

……魔法界ですらないしこの世界にも存在しない国を言われた

……しかも上忍……僕のクラスには長瀬楓と言う中忍がいる

組織自体が違つたろうから何とも言えないが分身くらいは簡単に出

来るだろう

それにあのカエル…ガマケンはヤバい
確実に化物だ…暴れるだけで麻帆良が崩壊するだろう

「……ケンさん、大丈夫です…後は何とかします……」

「……分かった、しかし逆口寄せは上手くいかんじやろっ」

「ええ…私は恐らく何か事故できた筈です…ケンさんとは呼ばれた
法則が違いますから下手な事はしない方がいいですね」
ケンさんは心配そうに言った

「生きてくれよ…では」

ボワアアンと凄まじい煙を出してケンさんは帰りました

さて……ここからですね

「申し訳有りませんが…この責任者と会わせて頂けますか？どう
も複雑なので……」

すると眼鏡をかけた老けた男性は言いました

「分かりました、私は高畑と言います…どうぞ此方へ…」
そうして私は建物の中に入っていきました

「……ぬらりひょんですか？」

「失礼じゃのう…君は」

案内された部屋に居たのはぬらりひょん……もとい後頭部が人外な
老人でした

……三代目くらいのお歳ですかね

「ワシは近衛と言う…君はは何かあったか話してくれるかね…君が

醤油臭い訳やバンドナにナルトがくつついている事もの」

「ふむ…ラーメンを食べている最中にのう…おまけに異界とは…」
近衛さんはふうむと考え込んでいます

ですよね…私もここが忍びのいない…変わりに魔法使いがいる世界と知った時は倒れそうになりました

「さて…リンジくん、これからどうするかね…」
近衛さんが聞いてきた

「そうですね…野山でサバイバルでしょうか」
すると近衛さんはニツと笑い言った

「ならば…ここで働かないかね？」

ふむ…身分の知れない自分を雇うメリットはあまりない…忍術目当てかな？

けど秘伝の術や禁術以外は教えても罰則はないし…第一私が使える禁術は八門遁甲に千年殺しだけです

「分かりました…やらせて頂きましょう」
すると近衛さんは笑った

「おおやってくれるかね」

何があるか分からない以上味方になっておいた方が特ですね

「あと…君には警備員をやってもらおう」
ん？警備員ですか？

「ここは結界を越えて人ならざる者や悪人がやってくるんじゃない…大丈夫じゃあの大ガマを呼び出せる君ならやれる筈じゃ」

そこでふと疑問を覚えた

「どうして私が大ガマを呼び出した事を？」
すると飄々とした風にいった

「監視カメラじゃが」

…なにそれ？

こうして私の麻帆良での生活が始まったのでした…

レンジ設定（前書き）

レンジは意外にハイスペックですが
ですが確実にネギには抜かれます
ネギのステータスの伸び率が二次関数ならレンジは最初の位置が高い
一次関数です

リンジ設定

身長 184?

体重 70?

黒髪でやや長めの短髪

見た目はそこそこに整っている

万能型だが幻術は苦手で中忍レベル

しかし体術や忍術は上忍でも上の方に位置する

ラーメンが好きで一樂によく行く

醤油が好きだがナルトに出会い味噌も好きになる

自来也と知り合いだが師弟関係ではない

よって悲しいかな螺旋丸は使えない

チャクラ量はナルト程でもないがかなり多くカカシよりは上である、
でも模擬戦は負け越しが多い

モテない、別に彼に問題はないのになぜかモテない
よってキスは一度もしたことはない

所有忍具

手裏剣、クナイ、口寄せの巻物

アイアンナックル

里ではアスマに次いでこれの扱いが上手く何人もの忍びを切り裂いてきた

リンジのメイン武器

起爆札

未だ書かれていない札が数枚
チャクラ感応紙

性質変化土、風、火の3つを体得している

特に上手いのは土遁

得意忍術

土遁・迷彩隠れの術

土遁・土矛

火遁・大炎弾

飛燕

口寄せ・屋台崩しの術

仙人モードについて

シマ様に教えて貰った為使用可能

但し自来也よりカエルっぽい

と言つか手足が半ばカエル

八門遁甲について

4門まで解放可能

これにより裏・蓮華（弱）

朝孔雀が使用可能

実家

森青家に血継限界はない

しかし代々森青家は札を作り売ってきた為、一族全員が札を作れる
上に高性能で仕上がる

リングも例外ではない

リングの札はガイヤマトが使っている

性格は頭が回るがそれよりもまったりした部分が目立つ事が多い

忍道は【自分が護る人を護り続ける】

ガマ達について

基本呼び出すのは1から3メートルのガマ達

それでどうにもならなかったらケンさんを呼び出す

ガマブン太は所謂最終兵器に当たる

二大仙人は命の危険が迫った時呼び出す

地味に通り名がある

通称 木の葉の黒紳士

礼儀正しい事からついた

下忍の指導担当もしている

モットーは見守り諭す

追加 仙人モードについて

彼の仙人モードは体の50%近くがカエルになる

この仙人モードの最大の特徴はガマの力と身体能力の増加である

チャクラの増加量はナルトや自来也の仙人モードに比べ少ないのだが体の半分がガマという特徴のお陰でガマの力と単純な力はナルトの上に行く

過去類を見ない程自然エネルギーを吸収しやすい体質でありこのよ
うな仙人モードになった

人というよりカエルの化け物に近い見た目になる

長い妙木山の歴史の中でこんな形態になったのは3人だけらしい
ある意味レアである

因みにこのせいかは不明だが大蛇丸の様に人間状態でカエルの舌が

出来る

(楓の前で見せれない術の筆頭格)

激動の初日（前書き）

初仕事です！

次回から長瀬魔改造計画発動！

1つ聞きたいですがタカミチ先生に忍術を習わせたい人は書き込んでください

激動の初日

「言わなければ良かったですね…」

私は今高畑先生と一緒に廊下を歩いています

警備員だけをやるはずが履歴を話してる時に下忍を指導していた事の下りを聞いた途端副担任にされました

担当は漢文だそうです

バックボーン等は分かりませんが句法、用法、韻等は直ぐ分かるのでこうなりました

「いいじゃないか、リンジ先生、このクラスは楽しいよ」

楽しいよと言われましても…已然のナルト君みたいな人でなければいいんですがね…

さて暫く歩くとドアが見えましたが…

「古典的ですね…」

黒板消しが挟まっています

「そうだ！リンジ先生…なるべく忍術は使わないでください
はて？」

「どういう事でしょうか？」

すると彼は真剣な目で言いました

「裏の事は一般の生徒は知らないんです…もしバレたらオコジヨに
されます」

オコジヨ…嫌ですね

「分かりました…そうしましょう」

そして私は高畑先生より先に一步踏み出しました

上から落ちてくる黒板消しを手で弾き、足元に張ってある縄は取り
敢えず跨ぎます

床が滑りますが無視できますね

次に矢が飛んできましたがしゃがんで回避します

おおーと歓声が聞こえますね

最後にタライが落ちてきました…派手にいきますか

「はっ！」

所謂オーバーヘッドキックですっ飛ばします

勿論一回転して着地です

「今日から1年間君達の副担任を勤めます森青リンジと言います…
よろしくお願いします」

教室から音が消えた後

「…かつこいいい！！」「」

…第一声がそれですか！？

「…何処から来ました！？」

既に高畑先生からもお墨付きを貰った答え…でっち上げのバックボ
ーンを話す

「静岡です」

「…何歳ですか！？」

「21ですよ」

女の子…3人よれば姦しいですねえ

しかし…このクラス、何か感じがちがいますね

特に座席表によれば…クーフェイさん、長瀬さん、龍宮さん、桜咲
さん…ラストはエヴァンジェリンさん

この人達は私を見る目が違います

あの人達が学園の裏に関わる人達でしょうね

「リンジ先生！ちよっといいいかな？」

おや？手にマイクとメモ帳ですか

「私は朝倉って言うんだけど…インタビューいいかな！？」

「ええ、構いませんよ」

……この後私は後悔した
根掘り葉掘り聞いてくるとは…アンコさんより質が悪いですね…

その後聞きました。今日は準備が出来ないので歓迎パーティーは明日になりました。

さて今夜から警備員ですか…私の忍術が何処まで通じますかね…
通じないならガマ達のオンパレードになりますかね

今日は高畑先生と見廻りですが…いきなり変な化物達が出てきました

「あれが鬼ですよリンジ先生…」

高畑先生がポケットに手を入れ構えている

さて…何が通じるかな

そう考えながらアイアンナツクルを装着し構える

「ここは私に任せて頂けますか」

さて…上忍の力を見せるとしましょうか

タカミチサイド

彼が手にメリケンサックみたいなのを嵌めた直後、ウンと音を立てて青い光を放った

「では…いきましようか」

そして彼はその場から掻き消えた

その直後金棒を持った鬼の首がいきなりとんだ

瞬動とは異なる物だ…放っている魔力とは違う

ふと彼の手を見れば青い光刃がある……気でもないし魔力でもない

そんな不思議な刃で切り裂いていく

「数が多いですね…土遁・黄泉沼！」

リンジ君はトンボを切ると手で複雑な印を結び両手を地面に叩き付けた

「なっ…」

地面がいきなり沼になったのだ

鬼達はズブズブと沈んでいき…やがていなくなった

……これは凄いな

「終わりましたか…」

風のチャクラを練り上げ込めた飛燕の術は無事に通用するようですね
黄泉沼も効きましたし

しかし…出力はともかくチャクラの減りが少し少ないですね

この世界の魔力とやらのせいでしょうか…

しかし魔法よりは気の方を知りたいですね

魔法は忍術で代用が出来ますし…チャクラの身体強化瞬身の術以外
は使いづらいですからね…早々にどうにかしなければなりません

こうして私の初出勤は終わりました

しかし私も高畑先生も気が弛んでいたのでしょうか

ある生徒が息を潜めその様子を見ていた事を…

「リンジ殿は忍びでござったか…しかしあの技は一体？」

そう…現代に生きる忍びに…

弟子出来ました(前書き)

出来ました!

さて…楓はドンドン変わって行きます!

弟子出来ました

「今日はここまでにします…明日は10ページですから予習をしておきましょう」

漢文の授業が終わりました

初めて見る文章ですが…論語は為になりますね

「リンジ殿…ちょっとよろしいでござるか？」

声のした方をみると私と同じくらい背が高い美少女がいました

スタイルも凄く良いので…テンテンやサクラは血の涙を流しそうですね

「どうかしましたか？長瀬さん…質問ですか」

懇切丁寧に教えてあげましょう

「ちょっと話があるのでござる…放課後ココに来てくれないでござるか？」

地図を指しながら言う長瀬さん

ああ！上目遣いをしないで下さい！

「分かりました…では放課後に」

さて…どんなお話でしょうか…

楓サイド

無事に成功したでござる

昨夜の体捌きは正しく忍びの物…強者とお見受け出来るでござるしかし…あの術はみた事がござらん…もしあの術が習えるのなら拙者はより強く成れるでござる！
ふふふふ…楽しみでござるな

やって来ました、公園です
人気がありませんね…

公園には様々な思いがあります
パンチラを見て大フィーバーしていた自来也様を通報したり、屋台
のおでん屋でイビキさんの拷問の愚痴を聞かされたり…あの時のが
んもどき程美味しくない物はありませんね…

飯食べてる時に指絞めやら爪剥ぎやら螺込みの話はしないでしょ
う……普通…

おや…長瀬さんが居ましたが…何ですかあの露出の多い着物…

「やって来ましたよ長瀬さん…というか…目のやり所に困りますね」
すると長瀬さんはやや笑いながら言いました

「拙者は忍びでござるからな」

……はい？そんな衣装で忍び！？

「ど…どうしたのでござる！？」

「いえ…何でもありません」

綱手様並みのスタイルに露出………この世界の忍びは変わってますね

「で…長瀬さんが忍者として…何故私を？」

まあ…予想はつきませんが…

「昨夜の戦いを見たでござる」

「やっぱり見ていましたか！」

「ヤバいですよ高畑先生！！」

「私勤務初日からオコジョですか！？」

「くそっ！上忍として一生の不覚！」

「そうだ！蛙変えるの術で長瀬さんをカエルにしてパーにしてしまえ
ば…！」

「変わった術でござったな…」

「変わった？おかしい…土遁を見た事がない？」

「しかし立ち居振舞いは彼女が忍である事を示している

つまり…この世界に忍術は存在しない？」

学園長は忍びがないと言っていました…隠れていると言つ事でしょうか…だとすれば忍術が発達しなかったのも頷けますね
つまり術の形態が根本から違つはずですね

「……君はあの術を習いたいのですか？」
これが目的の…」

「話しが早いでござるな」

笑顔が可愛い…いかんいかん！さて…もし運良く戻つた時に成果として別の術体系が手に入れば…そうお咎めはないでしょう
この子は忍びなら教えるのも吝かではないですし

「見た事を秘密に出来ますか？」
殺気を出しながら尋ねます

これで耐えられるなら合格です

耐えられないなら…蛙変えるの術で暫く黙って貰いましょう

「……もちろんでござる」

少し震えています…合格ですね

「分かりました…お教えしましょう…その前に誓約書を書いてもらいます…がよろしいですね？」

すると長瀬さんはニコニコ笑顔で頷いた

「では…蔵出し！…ゲロ吉さん！」呼び出したのは自分の中に蔵入りしている巻物ガマのゲロ吉さんです

「……エライ場所におるのう…」

「ま…異世界ですから…長瀬さん？」

ブルブル震えていますね？

「か…カエルは嫌でござるう…！！…！！」
凄い速さで逃げ出した！？

「ち…ちよつと待ちなさい！」

カエル嫌いなんですか！？

知りませんよそんな事！

「な…かした、な…かした」

「黙りなさい！百舌鳥の早贄の様にされたいんですか!？」

「分かったからのう…ワシは蔵入りするわ…」
蔵入りしてもらい匂いを頼りに追い掛けます

暫く走るとガタガタ震えている長瀬さんがいました

「長瀬さん…カエルはもういませんから」

……涙目で振り向いた長瀬さんの顔にクラツと来た私はロリコンな
のでしょうか？

「ほ…本当でござるか!？」

そこまでカエルは嫌ですか…仙人モードを見せたら泣きますね

「はい…ちゃんと忍術は教えてあげますから」

すると長瀬さんにはにっこり笑いました

「良かったでござる…宜しくお願い致しますでござるよ師匠!…」

師匠ですか…先生は言われ慣れてますが…師匠は初めてですね

「分かりました、頑張りましょう長瀬さん」

すると長瀬さんは少し眉を潜め言いました

「む…師匠なんでござるから…楓と呼び捨てで構わないでござる」

呼び捨てを許されるとは…

「分かりましたよ、楓」

「あいあい、それでいいでござるよ」

こうして私に異世界の弟子が出来ました

さて…どう指導しますかね…

おまけ

「ついでに顧問もしてみないでござるか？」

顧問… やっておいの方が良いと高畑先生が言っていましたっけ…

「構いませんよ、お引き受けします」

「よしっ 散歩部に顧問が増えたでござる！」

「はっ…………… 散歩？」

蛙変える(前書き)

さて…出来ました

次回はあの吸血鬼が！

蛙変える

私は少々頭を抱えました

楓が現在使える忍術に影分身があるのですが…チャクラなしで気で作り出すとは…燃費を考えると影分身を教えるメリットが少ないのです

単独行動時の情報共有などチャクラ影分身のメリットもあるにはあるのですが…

どうも気は身体エネルギーのみで練り上げられたチャクラに近い物のようです

あくまで近いとしたのは高畑先生に借りた魔法の本に咸卦法と言うのがありますがこれは究極とも言われる難易度らしいです

しかし…魔力が私達の言う処の精神エネルギーならば…私達の世界では誰も彼もが究極技法を使っている事になります

さすがにそれはおかしいので気は身体エネルギーの様な物、魔力は精神エネルギーの様な物と言う似ている物と言う解釈で間違いは多分ないでしょう

しかし…もし魔力が別物ならチャクラとの融合を試して見ましょう…ひよつとしたら仙人モードの改良に役立つかもしれません

しかし…天才はいるものですね…チャクラを術に使うまでに大体1週間はかかるのですが2日でコツを掴み今では…

「おおっ！木の横に立てるでござる！」

木登りが出来ています

基礎がずば抜けて高いですね…後は変わり身、分身、変化と言ったところでしょうか

テンテンの様な武器口寄せを教えてもいいかも知れません

「師匠！出来たでござるよ〜！」

……こつという笑顔を見る事が出来るのが師匠の特権ですね…体術や系統忍術も時期を見て教えましょう

さて私は学園長の部屋に書類を届けにきたのですが…1人の女生徒と色黒の教師と高畑先生が2人の侵入者を困った目で見ていました
「どうかしましたか？」

高畑先生が振り返り疲れた表情で言いました

「いや…高音君とガンドルフィーニ先生が捕まえたんだけど…尋問出来ないんだ…専用の部屋に連れていこうにも舌を噛むし…」
ふむ…困りました

「貴方は誰ですか？」

その時女生徒が訝しげに言いました

「自己紹介がまだでしたね…私は森青リンジ、2-Aの副担任で裏表で高畑先生のサポートをしている者ですよ」
すると女生徒は相好を崩し言いました

「そうでしたか…私は高音・D・グッドマンです、以後よろしくお願ひ致します」

良い女の子ですね

さて太いのと細いのいる侵入者ですが…どうしますか…木の葉なら最凶のイビキさんに頼むのですが…いませんからね、とつかいたら不味いんですが…

仕方ないですね…自来也様スタイルで行きますか

「私がやってみます、変わって頂けますか？」

3人に頼むとすぐ変わってくれました

「さて…吐く気はないのですね？」

睨み付けながら言っても寧ろバカにしたように見えます

……腹が立ちますね、ええかなり

「そうですね…私はこういった事は余り好きじゃないんですが…仕方ないですね」

にやりと笑い細い方の頭に手を置きました

「はぁ？何すんだよ！」

はたからみれば頭を撫でているように見えますが…

「忍法…蛙変えるの術!!」

ボワアンと煙が上がり

「ゲコゲッコ！ゲコゲッコ！」

トノサマガエルが出てきました

「……はあああああ!?!?!」

全員が絶叫しますが無視します

「さて…貴方も吐く気はないのですか…無いなら彼みたいになって一生トンボやバッタを食べて生きていきますか?」

すると太い男はガクガク震えだし

「言う!言うから!」

と言いました

そのまま情報をすべて吐かせます

「嘘偽りはないですね?」

頭をブンブン縦に降る男

「分かりました…解!!」

再びボワアンと煙が上がり

「俺…一体何が?」

人間に戻りました

さて後はガンドルフィーニ先生がやってくださるでしょう

「では…私は失礼します」

あっけにとられる面々を残し私は退出しました

渡す書類を高畑先生に渡して

タカミチサイド

「先生…彼はマギステル・マギなのですか?」

高音君が訪ねてくる

「いや…彼は忍びだよ」

高音君はリンジ君のさっきの拷問まがいの行動が納得出来ないようだ

「あれは…普通する事ではありません！」

彼女はそう言うけど…やっぱり物事には裏があり闇がある

「けど…ああしなれば埒が空かなかった」

とガンドルフイーニ先生が言う

「彼は僕らの仲間だ…余りそついう目で見てはいけない」

たしなめると渋々ながら高音君は頷いた

…私達はリンジ君の事を余りにも知らない

いつかは知らなければ…

それに…エヴァの事もある

どうも先日のがマケンさんを彼が呼び出した所を見たらしい

…いやな予感がする

「リンジ先生ですか？」

帰り道に珍しく話しかけられました

「おや…茶々丸さんじゃないですか？どうしました…こんな夜遅くに？」

すると茶々丸さんは無表情のまま言いました

「申し訳ありませんが…マスターがリンジ先生をお呼びですので…

来ていただけませんか？」

マスター？怪しいですが…行くしかないようですね

いざとなれば…フカサク様とシマ様を呼ぶまでですしね…

「分かりました…どちらですか？」

こうして私は茶々丸さんについて行く事にしました

やれやれ…何かが起こりそうですね…

蛙変える（後書き）

「私は600歳を超える吸血鬼だぞ！」

「そうですね…私の師匠のカエル夫婦は800歳を越えていますし
大ジジ様は数千歳で数える所ではないですよ」

「は……？」

こんなシーンを入れます
多分

吸血鬼（前書き）

出来ました！

次回！

咸卦法VS仙人モード！！

吸血鬼

さて… ログハウスにきた私は茶々丸さんに案内され中に入りました
「やあ、先生呼び出してすまないね」

エヴァンジェリンさんのお宅でしたか… 全身の警戒レベルを引き上げます

ペイン襲来以来ですね… ここまで引き上げたのは

「ご託は構いません… 私にようがあるのでしよう…」

さて… どうでるか

「ふん… バカではないようだな… 単刀直入に言う、貴様はなんだ？
やはり… 気付きましたか

彼女が学園の裏に関わる物なら先日のがマケンさんについては山程聞きたいでしょう

「私は… ただの忍びですよ」

すると目付きが異常につり上がりました

「ただの… ただの忍びにそんな事が出来るかあー！」

怒られました… しかし態度が悪いですね

「それはともかく… エヴァンジェリンさん目上の人には敬語を使いなさい」

ますます… 震え出した！？

「貴様… 私は600歳を超える真祖の吸血鬼！ 闇の福音！！ エヴァンジェリン・A・K・マグダヴェルだぞ！！」

… なるほど頷ける

「なるほど… 吸血鬼ですか」

出されている紅茶を1口飲む

「どうした… 驚きで声が出ないか？」

エッヘンと胸をはるエヴァンジェリンさん

「いやあ… なんとというか… 貴方より歳上の方を知ってますからね…」
あたりに沈黙が流れています

「私の師匠のカエル夫妻は800歳を越え仙人ならぬ仙ガマになられてますし…総領…大ジジ様は齡数千を数えるお方ですから…貴女が吸血鬼で600歳を越えていても驚く理由がありませんよ」
納得してもらえましょう

「バカな！？私がカエルに負ける筈が…いやそもそもそんなカエルがいる筈が…」

こちらの世界にはそんなカエルはいないんですか…すこし悲しいですね

「それは私は異界の忍びですから」

む…お茶請けのクッキーもいけますね

「ふざけるな！！そんなバカな事が…」

ふむ…証拠が要りますかね

速やかに印を結びます、発動する術は得意忍術にしてこの術で何十人も暗殺してきたものです

「土遁…迷彩隠れの術」

スーツと体が透明になり姿を隠しました

術を解いて反応を待ちます

「…信じられん…精霊の力を借りず己の力だけで行うとは…」

…この世界には精霊がいるのですか？驚きですね…そう言えば…授業の時誰か1人多かったような…ま…気のせいでしょう

もし見えたら悪霊でしょう…所詮私は人殺しですから

「マスター…リンジ先生の術ですが…気も魔力も感じられません」

茶々丸さんの発言に驚いたのはエヴァンジェリンさんです

「何！？どういう事だ」すると茶々丸さんは言いました

「リンジ先生の力は気と魔力の中間のような物です…咸卦法に近いものですが原始的で気や魔力その物ではなくその源となる物を融合しているようです」

チャクラに関しては予想が当たったようですね

「凄いですね…私達が使う忍術は身体エネルギーと精神エネルギーを練り上げて出来るチャクラを使用します」

エヴァンジェリンさんはうーむと考え込んでいます

「もう用はありませんか…なら頼みがあります」

「頼み…だと？」

エヴァンジェリンさんは怪訝な目で見ました

「魔法、気又はそれに類する物を教授してほしいのです…対価に私達の忍術について教えましょう…」

するとニヤツと笑い言いました

「私達が技術を奪っただけで教えず血を吸うとは考えないのか？」

その言葉を聞いた時直感的に嘘だと分かりました

「そんな事はしないでしよう…話してみても分かりましたが貴女は誇り高い人です、こんな騙し討ちはしないでしよう」

そして一拍置いて言いました

「私とて故郷の裏の世界では2000万両を超える賞金首…木の葉の黒紳士です…そう簡単に負けるつもりは有りません」

エヴァンジェリンさんはその言葉を聞いて笑いながら言いました

「ハハハハハ！良いじゃないかリンジ先生？いいだろう！この闇の福音が直々に教えてやろうではないか！」

交渉成立ですね…まずはチャクラの練り上げ方の改良と気の修得…そして仙人モードの強化改良です

「よろしく頼みますね、これからリンジと呼び捨てで構いません」
するとエヴァンジェリンさんも言いました

「なら私もエヴァで構わん」

そして我々は握手を交わし別れました

明日から楽しみですね

そして私は明日この世界に来て初めて全力を振るう試合に臨む事になるとはと露とも知るよしもありませんでした
それも他ならぬ高畑先生と…

咸卦法VS仙人モード！！前編

さて私は今現在高畑先生の前に向かい合っています

高畑先生は申し訳なさそうな…それでいて強者と闘える喜びが見え隠れしています

回りには裏に関わる先生達に加え龍宮さんに高音さんにエヴァまでもがいました

先日の侵入者を問答無用でカエルにし強引に吐かせた事が他の先生達に知られその事が問題になったのです

得体の知れないとか立派な魔法使いじゃないとか色々言い出したらしく信頼できるだけの實力を見せろと言う事です

そして闘う事に成った私ですが口寄せはしてもいいですが巨大なカエルは出してはいけないルールです

しかしこれを逆手に取れば小さいカエル…つまり二大仙ガマを呼び出すには禁止されていないと言う事です

なので私は条件を聞いた後直ぐに目の下に隈取りを作り待機状態にしておきました

さて…始まりますね

「両者…前へ！審判はワシ近衛が勤める！…はじめい！！」

高畑先生はポケットに手を入れたままです

取り敢えず様子見ではクナイを投げましたが全弾落とされました

「……………どういう事です？」

そして強烈な悪寒がしたのでしゃがんだ所目に見えない塊が猛スピードで飛んでいきました

厄介ですね…すると高畑先生が瞬時に消え一瞬で間合いを詰め拳のラッシュが来ました

「ホントに…強いですね！！」

迫り来る強烈な拳を払い、流し、弾き、捌いていきます

そしてそのまま回転しその勢いを足に載せチャクラで強化して…！

「木の葉剛力旋風！！」

高畑先生に叩き込みました

さて…反撃といきますか

タカミチサイド

つつ…！強烈な蹴りを貰ったな…しかし間合いが放されたか、これから何を仕掛けてくる？

「火遁…豪龍火の術！」

彼の手が印を結び息を吐き出すと口から龍の貌の火球が飛んできた真横へ避けると彼が自分と同じように間合いを詰めていて…

「土遁…土矛！！」

黒く成った腕でぶん殴ってきた

ガードしたが腕がへし折れそうな衝撃がきた……忍術はホントに不思議だな

だけど…負けるつもりは毛頭ない

まだ僕にはアレがあるのだから…

楓サイド

拙者は師匠が今日本気で闘う事を教えてくれたので気配を極限までに殺し見ているでござる

今は拮抗しているでござるが…師匠は今回切り札の1つ仙人モードを解禁するらしいのでござる

これは間近で見るチャンスでござる

フフフ…見逃さないナリヨ

高畑先生の感じが変わった？

「リンジ先生…ここから全力でいかせてもらおうよ！」

そして右手と左手に各々違う何かが集まり出しました

これは…本に載っていた究極技法…咸卦法！？

右手と左手を合わせた後…急激に纏う物が変わりました

マズイ！！

「ハアアア！！」

両手を重ね打ち出されたのは先ほどの空気の玉が砂利に見える程の一撃！！

間一髪変わり身で丸太と入れ替わりましたがその丸太が一瞬で木屑に変わりました

……チャクラで強化した体でもアレを喰らったらヤバいですね…瞬時にチャクラを練り合わせ二大仙ガマを呼び出そうとした時第2波が来て……私は土煙を上げて吹っ飛ばされました

しかし…既に舞台は整いました

……油断はダメですよ高畑先生？

エヴァサイド

タカミチの豪殺居合い拳がリンジに直撃した

流石にアレを喰らっては起き上がれないだろう

そう思った時だった

今まで感じた事のない異様なエネルギーを感じた

土煙の中からだ…まさか起きているのか

茶々丸を見るととんでもない事を言い出した

「小さな生体反応が2つ増えました…恐らく口寄せかと」

口寄せ…だがタカミチに勝つには少なくとも大きな力エルが必要だが…

その時だった

「リン坊！お前は何でこんな場所に呼び出すんじゃない！？」

「まあまあ母ちゃん落ち着きーや…リンジちゃんだって事情つちゅう物があるやろ？」

2匹の声がする

「申し訳有りませんでした、頭と姉さん…しかし必要だったので…」
すると女と思われるカエルが言った

「しょうがないの〜」

男と思われるカエルも言った

「行くぞいリンジちゃん！」

そして最後にリンジが土煙から現れた

しかし…その姿は全く違っていた

黒髪のオバチャン風のカエルと白髪に白い髭のカエルが左肩と右肩に合体しており黒髪は腰まで伸びている

瞳孔は平たく鼻は大きくなり顔も変わっている

そして手足でまさにカエルとなっている…

カエル人間？いや…このタカミチの咸卦の氣に負けない力は…

「貴方の切り札が咸卦法なら…私の切り札は二大仙ガマをこの身に口寄せし仙人となる仙人モードです…さあ仕切り直しといきますか
！」

リンジが叫ぶとタカミチも構えた…ここから真の闘いだな

「しっかり録画しておきます」

ナイスだ茶々丸

さて…楽しませろよ？2人とも…

なお仙人モードとなった自分の師匠を見て気配を消したまま気絶する
というある意味難しい事を行った忍者少女がいたそうだ

咸卦法VS仙人モード!!後編(前書き)

出来ました

感想あれば書いてください

今回はバトルがやや少なめです

咸卦法VS仙人モード！！後編

森青リンジは天才ならぬ秀才である

彼は幻術を除けば木の葉でも上に位置する

しかし言い換えればそれが限界なのだ

速さと力はガイに劣り

忍術と技はカカシに負け

チャクラ量と発想力はナルトに遥かに劣る

日向やうちはのような瞳術や秋道の肉体変化、奈良の影術に代表される血継限界もない

準一流は一流にはなれない

しかし、ならば彼はどうしてこう言った優れた才ある者と並び立てるのか

それはガマの力だった

彼は彼だけに許されたガマの力を扱っているのだ

元来仙人モードの完璧な完成形は人外の外見ではなく唯、瞳が変わるだけである

しかしリンジは違った

制御が上手く出来ず人外に近い姿になってしまう

しかしその結果は全く違う仙人モードのもう一つの完成形を生み出すそれはガマの力を扱う仙人モード

最大出力は劣るがガマの舌や油の質に効率、そして人には出し得ないガマの声域をすら扱える

それが彼の仙人モードだ

もちろんたゆまぬ努力の成果である

タカミチもまた魔法使いになれなかった男だ

魔法が出来て当然の世界で先天的な詠唱が出来ない体質だったのだ

しかし彼は諦めなかったその成果がこの世界における究極技法、咸卦法である

気と魔力：各々磁石のSとNの様に反発する物を合成し爆発的な力を得る物だ

究極技法と呼ばれるだけあり修得は困難を極める

もし合成に失敗した場合は両の腕が吹き飛んでもおかしくない程の危険度である

それを使いこなし高潔な精神で害為す者を倒す

それこそが彼がもつとも立派な魔法使いに近い所以であるタカミチサイド

「仙人：か、ホントに変わってる」

高音君がなんて醜いと言っているけどね：あれはマズい

彼女にしてみれば外法に手を出した魔法使いの様に思えるかも知れないけど他生物：それも両生類との融合なんて普通はあり得ないそれを為しうるのが忍術とはね

「リン坊！今日は天麩羅じゃわい！父ちゃんは風遁でリン坊は油じや！！」

天麩羅？……マズイ！！

「仙法・五衛門！！」

煮えたぎる凄まじい量の油が襲い掛かる

「ホントに：君はなんなんだい！？」

豪殺居合い拳で吹き飛ばしながら回避する

ガンドルフィーニ先生は障壁を張ったけどすぐに破れたらしく回避している

……広範囲殲滅術か……

「試合ですけどね：これくらいは避けますか」

いや！避けなきゃ死ぬから！！

そう言いつつ僕は豪殺居合い拳を連発した

「ぬわっ！！」

爆転、側転、瞬動もどきを駆使して見事に避ける

「『殺す気ですか！？』」

……君にだけは言われたくないよ！！

エヴァサイド

まさか咸卦法のタカミチと真つ正面から互角とは……

フフフ…我が教えを受けるに相応しい奴ではないか！！

それにだ…私は悪の魔法使いだが…リンジは忍びだからな正義を振りかざす魔法使いよりはよっぽど好感が持てる

「仙法・毛針千本！！」

おお…髪の毛をマシンガンの様に連射している
禿げないのか？

「髪の毛なんか！飛ばしていいのかい！？」

居合い拳の連打で針を叩き落としながら言った

「チャクラで活性化してますからね…禿げませんよ！！」

禿げないのか…しかし物の硬質化まで可能とはなんでもありかチャクラは…

「二連舌戦斬！！」

爺力エルとリンジが舌を…ってなに！！舌が伸びた！？

カエルはともかくもリンジは人間だろう！？

そのまま舌を振り降ろすと地面がズバツと断ち切られた…もう突つ込まんぞ…

リンジ…吸血鬼の私が言うのもなんだが…人間半分くらい辞めてないか…？

「……人間かい？」

タカミチも呆然と言うが

「失礼ですね…何処からどうみても人間でしょう！？」

いや！見えないからな！！

しかし…とても強いですね高畑先生は…ここまでボロボロになるとは…向こうもボロボロですが

「リンジちゃん…あいつ強い」

フカサク様も仰る通りです…恐ろしく強い

「1つ聞きたいんだけど…君にとって正義とはなにかな？」

高畑先生が聞きました

「私自身としては…絶対的な正義などないと思います…例えばある所で内乱がおき、それを被害が出ないように平定します…しかし反乱の理由が食糧難や君主の独裁だったら…貴方達は自分達を正義だと言えますか？」

木の葉の里に壊滅的な被害をもたらしたペインだつて後でナルト君に聞いたら世界平和の為に戦っていたと言つんですから…

「立場によつて正義は変わります…所謂少数派の正義が大多数の正義の為に悪となる…私はそう考えています」

……理解できる人と睨み付ける人半々くらいですか

理解する人はエヴァ、高畑先生

睨み付ける人は高音さん、瀬流彦先生

どっち付かずがガンドルフィー二先生、龍宮さん、刀子先生ですか

「……最後に私にとつての絶対的な悪は私にとつて大切な人に害為す人です」

立派な魔法使いが不特定多数の人の為に戦うなら私は自分の忍道の為に戦うだけです

全てはどう足掻いても救えない

ならば自分の手が届く所だけでも護るのが私の忍道です
魔法使いの視点からすれば真逆のベクトルですけどね

「ふう…学園長、此処等でもいいんじゃないんですか？」

高畑先生が咸卦法を解きました

それを見て私も仙人モードを解きます

「リンジちゃん…気は抜くんじゃないぞ」

「リン坊！今度は場所考えて呼び出しーやー！！」

ボボンとお二方が消え私も元に戻ります

髪の毛は伸びつぱなしですが

「うむ…皆も彼の力は分かったと思う！彼はワシ達の仲間じゃー！！」
この一声を合図に皆ゾロゾロと帰っていきました

「すまんかったのリンジ君…ああでもせねば納得はしないんじゃよ」
組織の長として落とし処を見付ける事に苦労したのでしょ

五代目も苦労してましたからね

「構いませんよ…ではこれで」

私は歩き去りました

「タカミチ君…ワシ等はいいい拾い物をしたかも知れんな」

タカミチは頷いた

「リンジ先生が麻帆良にどんな影響をもたらすんですかね…」

2人して頷いているとリンジが戻ってきた

「ああ…言い忘れてました！」

タカミチが首を傾げる

「どうかしたのかい？」

そしてリンジは爆弾を落とした

「楓が自力で私を忍者と見抜きました、なんで今私の弟子になつて
ます」

いきなり麻帆良に影響を与えていた、オマケに一般人最強レベルの
猛者を弟子にしていた

2人はともに乾いた笑い声をあげるだけだった…

むむ…ここは…

「気が付きましたか？」

目の前にリンジ先生の顔があるでござる

しかもこの体勢は…お姫さま抱っこでござる！？

「あ…いや！その…」

恥ずかしいでござる！

「頼みますから…林の中で白目向いて立っただまま気絶しないで下さい…ギョツとしましたよ」

…千年の恋も1日で覚めそうな様子でござったか…

「楓は私の大切な弟子なんですから…気をつけて下さいよ」

表情を暗くて読めないでござるが心配している気持ちはビシビシ伝わってきたでござる！

…気を付けなければ…

「所で師匠はいつの間にもポニーテールになっているでござるか？」

師匠はふつと笑い

「イメチェンですよ」

と言ったでござる

「似合わないでござる」

一刀両断したでござるが

「ぐふっ！！」

しかし…誠にいい師匠に巡り会えたでござるなあ

こうして拙者はお姫さま抱っこのまま大人しく女子寮に連れて行って貰ったのでござった

麻帆良の1日（前書き）

出来ました！

感想あれば是非書き込んでください
次回は楓の風遁修行か課外活動です

麻帆良の1日

私は学園長から貸して貰った中等部に程近い和風の一軒家に住んでいます

…… なんと言うかボロいです

まあボロいのがからこそ一軒家なのでしょう

また散歩部の顧問になったのですが何故かここが部室になりました……部員の鳴滝姉妹に言わせると広いから！と返事が帰ってきましたそして買い込んでいた御菓子の半分を姉の風香が食い荒らしていきました…… ああ私の御菓子……

取り敢えず回想はやめて朝食を作りますか……

メニューは味噌汁と卵焼きです

15歳で親元を離れて独り暮らしですからそれなりには料理が出来ます

たまに肉じゃがとかをナルト君にお裾分けしますが…… 拉麺ばかり食べててバランスは大丈夫なんでしょうか？

さてスーツに着替えて出勤します

スーツの手の裾にアイアンナックルを仕込んであります

最低限の自衛手段は必要ですからね

テクテク歩くのも好きですが大抵は人の目につかないような所を全力で走って行きます

結構いい鍛練になって気持ちが良いです

学園近くになつたら歩きか早足に切り替えて不自然では無いように移動します

朝の職員会議には余裕で間に合いますね

タバコでも吸いたい処ですが…… 木の葉と違って殆どの場所が禁煙に

なっているのには驚きました

以前亡くなられたアスマさん程吸う訳ではないのでいいのですが

さて…一時間目は楽しい楽しい私の漢文です

相変わらずトラップが仕掛けてありますが問答無用で突破します
最後にバケツが降ってきましたがアッパーで砕いてお仕舞いです

「強そうアルナ…」

最近クーフェイさんが私を玩具を見るような目で見てくるのですが
…気のせいでしょうか？

教室の空いた机に女の子が見えた気がしましたが…スルーします
疲れてるのでしよう

教科書を開き授業を始めます

今日は李白です

説明している内にバカレンジャーと呼ばれるおバカさん達の3人…
綾瀬さん、神楽坂さん、クーフェイさんが居眠りを始めました

そんな人達には…

「フツ…ハアツ!!」

チョーク手裏剣をプレゼントです

ヒュン!と空気を切り裂いて飛ぶ白いチョークはそれぞれ過たずお
でこに直撃しました

「あたっ!」

「つつっ!」

「いたっ!」

さて全員起きましたね?

「授業は聞いてくださいよ、…さもないとさっきのチョーク手
裏剣3連射しますよ…」

「…分かりました!」

いい返事です
楽しいですね…色々

さて授業が終われば休み時間です

私は副担任なので大した仕事が無くなったので職員室を出て自販機でジュースを買いに行きました

「これにしますか」

選んだのは 世界樹のしずく と言うジュースです

使われている水は世界樹の露を丁寧に濾過した物にフルーツを加えた物です

飲んだ瞬間、芯からずっしりと疲れてる体を回復している様な気持ちになります

……美味しいですね

放課後はひたすら散歩です

「どんどん行くよ〜！楓姉に顧問！！」風香さんは元気が良いですね

「待ってよお姉ちゃん！！」

史伽さんが置いてかれてます

同じ双子なのにこころも違うとは…

「師匠…どうやら師匠の自宅の方へ向かっている様にお見受けするでござるが…」

……はい？まさか…ね

「顧問〜！お腹空いた〜！！」

やっぱりですかっ！！

「師匠〜拙者もでござる〜！！」

楓、お箸をもってウキウキしてる場合ですか！？

「あ〜手伝いましょうか？」

ああ…史伽さん優しいですね
今日のメニューは唐揚げでしたが…材料が足りないので急遽天ぷら
やコロッケも追加しましたが…
「美味し〜い！おかわり！」

「拙者もおかわり！」

「あの私も…」

ここは私の家で食堂でもなければ給食でもないんですが？

「美味しいよね〜週一回顧問の家で食べようよ！」

何言ってるやがりますか！？

「…さんせ〜い（でござる）…！」

…あとはどうして上目使いでウルウル子犬みたいに見てきますか
ね…

「分かりました！毎週一回ですよ」

でもまあ…独りで食べるよりは楽しいですからね

「顧問〜冷蔵庫のアイスクリーム食べていい？」

「風香さん！貴女は自重しなさい…！」

それは私のアイスクリームです…！！

夜は楓の修行です

「楓、今日から忍術に入ります…ではこれを」

チャクラ感応紙を渡します

「…ティッシュでござるか？」

ティッシュな訳無いでしょ！

「これはチャクラ感応紙と言って貴女に向いている忍術の系統を見
ます…手にチャクラを集めてください」

楓は頷くとチャクラを集めていきます

「では紙に流してみてください」

「分かったでござる」

そして紙はスパッと真つ二つに切れました

「おおっ！！真つ二つでござる！！」

風ですか…楓に合っていますね

「貴女の性質は風です…風遁ですね」

楓は大興奮している様ですね

「風！？そ…それはどんな性質でござるか！？」

「風の性質は…ありとあらゆる物を切り裂き吹き飛ばす攻撃特化の性質です」

楓は攻撃特化と聞いてはしゃいでいますが…これだけは言っておかないと

「楓…この術を習得すれば貴女の実力は飛躍的に上がるでしょう…しかし力は予期せずして人を溺れさせます」

楓は神妙に聞いています

「もし…貴女が力に溺れ私欲の為にその力を振るうのなら…私がこの手で殺します」

厳しい言い方になりますがこの世界に存在しない術を教えるのだから…力に溺れないでほしい

その為の…厳しい言い方です

「…師匠の言いたい事は分かるでござる…でも大丈夫でござるよ、拙者は師匠の弟子でござるし…その時は…構わないでござる」

目には真剣な光…覚悟は出来ているようですね

「分かりました…では頑張りましょう！」

「ハイでござるー！」

こうして楓の修行は次の風遁習得のステップに移りました

…腕の見せ処ですね

そう言えば…もうすぐ課外活動あつた筈
リュックを新調しなければいけませんね…

風遁修行！（前書き）

出来ました！

感想あればどうぞ！

あと主人公のパクティオーカードの特性が決まらない…
信仰か節制か…どっちにするかなあ…

風遁修行！

「楓：何をイメージしてチャクラを練っていますか？」

すると楓は頭を掻きつつ言いました

「無論、風でござる！！」

……忍術：特に系統のある忍術はチャクラの質、量が共に求められますが何より重要なのはチャクラを練り合わせるイメージです

例えば私は土がメインで風と火がサブです

土のチャクラのイメージは槌：巨大な槌で砕いて混ぜるイメージです
火のチャクラは高速回転……それが熱を持つまで練り続けるイメージです

そして風は薄く鋭く擦り合わせるイメージです

系統忍術はただ闇雲にチャクラを練っても意味がありません
重要なのはイメージです

質や変化量は新術に組み込む際に重要ですが既存の術の場合はイメージとチャクラがあれば印がその代わりをしてくれます

「楓はどんな風な風をイメージしました？」

今、教えたのは風遁の基礎：烈風掌です

これは基礎でありながらも上忍が好んで使う事もありますし忍具の急加速にも使えます

またその逆に忍具を吹き飛ばしたりする事も出来る優れものです、この術の延長線上に今私が使える仙術を除く最強の忍術、圧害があります

全チャクラの内、口寄せと同じく30%近くを一発で持っていけますが…破壊力は絶大です

こんな大規模な忍術を使う事など殆どありませんが…

「……草原に吹く爽やかな風を……」

……だからでしたか

突風ではなく、心地よい風が吹いたのは…

「良いですか？楓…風のチャクラのイメージは薄く鋭い紙を擦り合わせるイメージですよ」

「薄く鋭く…でござるか？」

楓が聞き返します

「そう…自分がイメージ出来る限界の鋭さと薄さをイメージして下さい」

……チャクラの感じが変わりましたね

これは…いけますね！！

「風遁・烈風掌！！」

ゴウツと突風が吹きましました

近くにある其なりの大きさの石が転がっていますからかなりの強さの風です

「……これを拙者が？」

しかし…天才かもしれないですね、まだまだ中途半端な練り方ですがいきなりでこれが出る事が凄いでしょ

「い…いやったでござる…！！！！」

ガバツと抱きついてきました！！

「い…いや落ち着きなさい楓！！」

い…色々！色々当たってます！！

「感謝するでござるよ…！！」

む…胸が！当たっています

「は…離れなさい！色々当たってます！！」

今更ながらに楓は気付いた様です

「これは…失礼したでござる」

顔が赤いですね…まあ私もですが

「さて…では楓に宿題をやってもらいましょ」

これは重要ですからね

「アレ、楓何を持っているアルカ？」

クーフェイが話し掛けてきたでござる

「ん？これは葉っぱでござるよ」

そう…ただの葉っぱでござる

「ふむ…切れ目が入ってるアル…分かんないアル！！」

そう言つてクーフェイは去つていったでござる

そう師匠が教えてくれたのでござるがチャクラは実は其れ自体が殺傷力のあるエネルギーだったのでござる！

実際に師匠はメリケンサックに刃が付いた様な武器にチャクラを込めて投げたのでござるが気を込めた拙者のクナイが木を抉つたのに対し師匠の武器は木を軽々と貫通するだけではなく更に3本もスコツと言う音を立てて貫通したのでござる！！

しかし拙者のチャクラコントロールは余りに未熟…

まだ対した変化量ではなく実戦に耐えうる物ではないとの事…

術の方は練習すればするほど威力が上がるのでござるがチャクラ自体はそうはいかないのでござる

術は印を結ぶ事で風の性質の底上げや精製をするのでござる

なれどチャクラ自体の場合は最初からそう練らねばならぬのでござる

これは葉っぱをチャクラだけで切る修行でござる

こうする事によりチャクラの変化量を上げるのでござる…

去れど…中々切れないでござる…

影分身を使えば効率は増すのでござるが、いかんせん上手くいかぬでござる…

早くマスターしたいでござるなあ…

風遁修行！（後書き）

前書きに書きましたが主人公の特性が決まらないです
意見があれば書いてくださると助かります
まあ取り合えず愛はありませんが…

別荘と仮契約（前書き）

アーティファクトですが強いと言うよりは、便利です
もちろんリンジ君の実力なら凄まじい効力ですが

別荘と仮契約

私は今エヴァに招かれて別荘に来ています

この別荘はここでの1日がなんと外の1時間なんだそうです……忍術では出来ませんねこんな事は……

今回はお互いが知っている事を話す為に来ました

「さて、じゃあ話せ、貴様らの忍術と忍びとやらを」
そう急かさなくても……

「いいでしょう、まず聞いた所によるとこの魔法使いは正義の為に動いてますね」

エヴァは頷き言った

「確かに、だがどれだけの人がその事を理解しているかは知らんがな」

正義の形骸化ですか……大変ですね、魔法使いも

「我々忍びは里の依頼によって働きます……護衛、奪取、運搬、戦闘……そして暗殺……平和と発展には綺麗事じゃやっていけませんからね」

そう魔法使いの平和は表しか見ていない

任務とは言え……里の物を護る為に人殺しも躊躇わない私達忍びの視点から見れば……偽善に感じます

いや……物事の裏に気付いていないと言うべきですか

「リンジ……お前の専門はなんだ？」

エヴァが聞いてきました

「内緒にして下さいよ……戦闘と暗殺です、最近は新人の教育ですが」
エヴァが感心したように言いました

「ふん……貴様はこの学園の奴等より遥かにマシだな」

それはどうも……

「話しを続けます……忍びの技は大きく分けて3つあります、チャクラを使い風を起こしたり物を燃やす忍術、相手の脳に干渉し幻を見せる精神攻撃の幻術、最後に肉体を使った格闘術……体術ですね」

エヴァは感心したように言いました

「ふむ…魔法使いに似ている処もあるな…そう言えば貴様がやる口寄せはどういうものだ？」

エヴァが感心を持つのならこの世界に口寄せはないのでしょうか

「口寄せは契約した動物を己の血液を媒体に印や巻物で呼び出す物です…こんな風に！！」

瞬時にチャクラを練り呼び出します

呼び出すのは3m程のガマで私にとってのカカシさんのパツクンの様な存在…

「御呼びかな…？リンジ」

腰に大小の刀を差し煙管を加えた敵ついガマ…

「すいませんね、衛門」

ガマ衛門、幾多の戦闘を共に駆け抜けた相棒です

衛門で相手にならないならケンさんが、どうにもならないならブン太ですがね

「其処な女童を斬ればよいのか？」

早くも腰の大小を抜き出した衛門

「違います！エヴァに口寄せを見せる為に呼び出したんです…！」
すると衛門は速やかに刀を収めた

「許されよ女童、某はリンジに忠義を捧ぐ者故に…」

衛門はペコリと頭を下げた

「……何と言うか…口寄せは変わっているな」

私はそう言わざるを得なかった

魔法使いにも使い魔がいるがそれは自分より弱い事が多い
自分より強大な力を持つ者を呼び出す…召喚術に近いな

しかし…こいつは異世界の忍び、世界の壁を越えて呼び出すとは…

魔界や魔法世界から呼び出すのとはレベルが違うな

しかも精霊の力や世界の魔力も使わずに己がチャクラのみか…

待てよ…コイツとパクティオーしたらかなり面白いアーティファクトが出るんじゃないか？
後で試してみるか…

エヴァからこの魔法使いについて聞きましたが…魔法使いの従者と
言うのには驚きましたね

様々なメリットがある様ですが一番はやはりアーティファクトと魔力
供給でしょう

魔力供給により身体の強化…更に様々な効果を持つアーティファクト
の力…興味深いですね

話を聞くとところによるとわりかし簡単に、おまけに解除も出来る様
ですね

この世界に今生きている以上はあらゆる物を利用するべきです
彼女は力を封じられた吸血鬼ですが修羅場を潜った猛者です

闇の福音の名を持つ彼女の従者と言う立場は私にとっては大きなアド
バンテージになるでしょう

彼女の話から察するに封印された今でさえ恐れられているようなの
ですから…

「エヴァ、私とパクティオーしませんか？私がこの世界にいる間従
者となります…」

さてやってくれるでしょうか

「そうか、そうか！私の従者になりたいか！！」……なんでしょう
向こうもコレを望んでいたような気が…

そうしている間に地面に魔方陣が描かれ連れてこられて…キスされ
ました

……目の前にいたエヴァが顔を離していきます

……あああ！！私のファーストキスがあああああ！！

「……お前まさか初めてか？」

ニヤニヤ笑うエヴァ！

「リンジ…お主…」

呆れた目を見せる衛門！！

しょうがないでしょう！女性に縁の無い生活だったんですから！

「色調が…緑、徳性が信仰、称号が”誇りを信ずる忍び”…方位は西」エヴァはブツブツ言っています

「アーティファクトは…韋駄イダテン天武か」

カードには木の葉の衣裳を来た私があります

「試しにカードを持ってアデアットと言ってみる」

言われるままにしてみます

「アデアット…」

パアアアツと言う光と共に白と青を基調とした肘まで覆う手甲と具足が装着されています

どんな効果があるか調べる為にチャクラを練り足と具足へ流しジャンプした時でした

「はい！？」

最高点に到達した後落下せずに空中に静止しています！

まるで確りとした足場があるかのように…

試しに手甲にもチャクラを流し入れると大地を掴む様に空気を掴めました

「リンジ…お前のアーティファクトはソレ単体でも優れた武器だが空中に足場や取っ掛かりを作り空中でも陸上と同じ戦い方をすることが出来るアーティファクトだ…使いようによればかなり強力だぞ」
空中戦での弱点は踏ん張りが効かない事ですが、これはその欠点を補える物の様です

元々飛べない私にとっては貴重な飛行手段にもなりえますいいアーティファクトですね

感動に打ち震えていた時

「リンジ…武具を手に入れたのは良いが…女童と接吻した事実は消

えんぞ?」

エヴァがこの発言にキレました

「キサマ…さつきからガキ扱いして…私はこれでも600歳は生きてるんだぞ!!」

衛門は煙管を燻らせ言いました

「ほう…ならば姥と呼ぶべきかね?」

衛門は忠誠心は高いのですが人の心を抉る発言が多いのです

「キサマ…!!」

しかし…ファーストキスがなくなってしまったのは残念です…ノーカンには…出来ません…

「そこに直れ…叩き斬ってくれる…!!」

「フン…後悔するなよ?」

…取り敢えずバトルに突入しそうな2人を止めましょうか
過ぎ去ったキスは二度と戻りませんし…

楓出陣！（前書き）

始めました！

感想、質問がありましたら書き込んで下さい

楓出陣！

「数が多いですね!!」

火遁で敵を焼き払いながらタカミチに呼び掛けます
最近呼び捨てを許されたのです

「ああ！まったくだ！」

タカミチも居合い拳の連打で敵をけちらしながら叫びます
……数が多いですね

八門遁甲で一気に吹き飛ばしても後が難しいですし

まあどうとでもなりますか

「しかし…あの2人は大丈夫かな…」

タカミチが心配しているのは桜咲さんと龍宮さんでしょう

あの2人はまだ学生ですしね…私は実力を知りませんが…

「タカミチ…すいませんが少し粘ってください」楓に持たされた携
帯電話を開きます

これですね

『もしもし、長瀬でござる』

出ましたか、さて頼むとしますか

「私です、楓…頼みたいことがあります」

向こうの感じが変わりましたね

『なんでござるか?』

さて…伝えますかね

「お待たせしました、タカミチ！」

リンジ君が帰ってきた

「誰に連絡を？」

鬼達は距離をとっている

「弟子ですよ…裏で戦えるレベルにはしましたから」

長瀬君をあの人2人の救援に行かせた!?

僕は思わずそちらを見たが彼は笑っていた

「大丈夫ですよ、楓は負けませんから」

そう言っつて口から真空波をだし鬼の首を跳ねている

……信じよう今は彼の、弟子の力を

「キツいな…だが、はああああ!!」

桜咲が敵陣に斬り込む

「ああ、やるしかないだろう!」

ピンポイントで狙撃しながら鬼を倒していく

しかし数が多く鬼はまだ呼び出されている

その時だった

一枚の巨大な手裏剣が鬼の首を跳ねた

「なっ!?!」

そうクラスで私を知る限り手裏剣を使うのはただ一人!

「ニンニン! 助太刀するでござるよ?」

長瀬楓がそこにいた

ふうっ間に合ったでござる

「楓…何故ここに?」

刹那殿が呼び掛けてくるでござる

まあしょうがないでござるな

拙者は今まで裏に関わってはいなかったゆえ…

「師匠の救援要請でござるよ」

そう言っつて鬼の方を向き印を結ぶでござる!!

「風遁…烈風掌!」

合わせた掌から突風が起き鬼共がバランスを崩す、その間を刹那殿

と真名殿が見逃す筈がないでござる…！

複数の鬼が一瞬で斬られて、撃たれ消えていったでござる

「……ここまでとは…」

一匹デカイのがいたでござる

「楓？その術は一体？」

真名殿が聞いてくるが今はあっちの巨漢の鬼が重要でござる！

「風遁…錬空弾！」

チャクラで練った空気の弾を発射するでござる

「ぐっ…だが倒せへんで…！」

鬼が一瞬ぐらついた時…刹那殿の野太刀が首を跳ねたでござる…見事な即席連携でござる！

「助かった…感謝するよ楓」

真名殿がお礼を言ってくるでござる

「いやいや、拙者も好きでした事でござるから」

その時ヒュオオオと風が吹き木の葉が舞い上がったでござる
そして…

「良くやりましたね…楓」

師匠が立っていたでござる

突然木の葉が舞い上がったと思うと…副担任のリンジ先生が立っていた

黒いズボンにポケットが多い緑のベスト、それに鉄の板が着いたバ
ンダナを頭に巻いている

この間、高畑先生と互角の試合をやったのけた人物だが…楓の師匠
！？

「ああ、そう言えば2人共ここで会うのは…出てきなさい」

和やかに言いかけた瞬間いきなり振り向いて戦闘体勢に入った

「よう分かったのう…」

人形の鬼が一匹茂みから現れた

「隠れるのならもう少し気配に気を配りなさい……八門遁甲……

第一門、開門！」

リンジ先生の額に筋が走り……なんだ！？体内の魔力みたいな物が跳ね上がっている……！

「ぐがあ……！」

先生は瞬時に鬼の間合いに入り蹴り上げた

そして宙を舞う鬼の下にリンジ先生がいつの間にか潜り混んでいる
そして鬼の腰を腕ごと掴み回転しながら落ちてくる……！！

「表・蓮華……！」

ズガアアンと鬼を地表に叩き付けリンジ先生が戻ってきた

「やれやれ……久しぶりだと疲れますね、この技は……」

……強いな、この人は

しかし……楓の師匠とは……

私も精進しないと

「良くやりましたね、楓」

師匠がニコニコ笑いながら褒めてくれるでござる

「ですが……忍び足るもの慢心はなりません、常に精進を積むことで
す……分かりましたか一番弟子？」

そう言っただけ微笑ましい顔の師匠は優しく言っただけござる

「分かったでござるよ師匠！」

まだまだ修行するでござるよ……！

天才……と言う奴ですね楓は

私なんかにはもったいない弟子だ……けど師匠として格好つけたいです
すからね

私も精進するとして……以前は諦めた第五門の開門を目指してみま
しょうか……出来なくともやってみる……其こそが成長する事なので
す
から

変化の術は色々と(前書き)

出来ました！

感想あれば書いてください！

変化の術は色々

「ふ…ふざけるなあーっ!!」

ここはエヴァの別荘です

どうもこちらの世界には幻術と言う変化の術に似た物があるのですが…

「何でそんな物にまで化けれる!？」

我々の変化の術はチャクラとイメージさえかつきりしていれば理論上どんなものにも化けます

流石に砂の様な群体は無理ですがそれ以外なら石ころだろうが手裏剣だろうが蛇だろうが何にでも化けます

「……エヴァの幻術は使い勝手が悪いですね」

どうもここでは人に化ける事はしないようです

「……能力や記憶はトレース出来なくても見た目も性別も自由自在…アイツのアーティファクトのようだな…」

アイツは誰か知りませんが…そう言ったアーティファクトでも手裏剣に化けるのは無理でしょう

「ん…声はどうなっているんだ?」

エヴァの疑問ですが…

「そんなもの一度や二度聴いて相手に化ければ声帯まで変わりますから普通に出せますよ?」

ポカーンとしてますね

「そ…そんな無茶苦茶があるかあーっ!!」
怒鳴られました

「無茶苦茶…とは、これは私たちの忍術の基礎の基礎…貴女達の言うところの”火よ灯れ”クラスの物なんです…」

「何なんだお前達は…個人の転移術が発達していないのに他人に自在に化けれるなんて…」

……私としては上級の魔法使いが様々な物を媒介にして転移する事が信じられませんが……私の世界では精々人間口寄せか、四代目の時空間忍術くらいしか思い付きません

さてところ変わって自宅です

「何ですって？」

少々耳が遠くなりましたか？

「だから……その……明日菜とデートしてほしいんでござるよ……」
聞き間違えではありませんね

「一体何があつたんです？」

するとポツポツ語りだしました

どうも明日菜さんはオジコンらしくタカミチに恋心を抱いているらしいのです

それで今度買い物に行くので男（渋いオジサン）に慣れておきたい……との事

そこでバカレンジャーのメンバーは立ち上がった！
と言うことらしいです

……愛の形は様々ですが早くからそんな特殊なフェチに目覚めているとは……

精々私の回りではイビキさんがDSですね

「分かりました、化けましょうか……」

可愛い弟子の頼みです

「ありがとうでござる……！」

だから飛び付くのはやめなさい！はしたない！！

さて、私の回りのオジサンと言える人は……

イビキさん……駄目だ怖すぎます

カカシさん……覆面つけてるから分かりません！

ガイ……論外ですね

エビス……ぱっとしませんね

イルカ先輩……若すぎます

自来也様……年行き過ぎですね

アスマさん……なんだかなあ……尊敬する人に化けるのは……

ここまで考えて1人いい感じの将棋仲間の顔が思い浮かびましたシカクさんだ！！

いや……あのへアスタイルは……不味いですね

チヨウザさんもイノイチさんもきついですね

シビさんやヒアさんも……辛いかなあ

……やっぱりあの人が一番マシですかね

「楓、本当にステキなおジサマをつれてきたアルカ？」

クーフエイが言うでござる

今回は明日菜殿の頼みでござる

「そうです！上手くいくんですか？」

夕映殿も言うでござる

因みにバカピンクこと新体操娘は部活であり欠席である

「大丈夫でござる！拙者推薦の人物に任せるでござる」

頼むでござる！師匠！！

その時だった

「よう、楓久しぶりだな、来たぞ」

渋くぶつきらぼうな声がして振り向くと

加えタバコの上に立った髪、がっちりした体格：泰然自若と言った

風情の御仁がいたでござる

……変わりすぎでござるよ〜！

確かに変化の術は教えてもらったでござるが…誰もが使えるが極めるのが難しい術でござる

秀囲気も歩き方もガラリと変わっているでござる

着崩したスーツがいい感じな…多分明日菜の好みのだストライクでござる

「楓の友達か？俺は猿飛アスマだ…よろしくな」

……やっぱりカッコいいオジサマはアスマさんしか居ないですね

さて…行くとしますか…

「神楽坂さん？楓から話しは聞いてる、今日はよろしく頼む、猿飛アスマだ」

楓、ナイス！！

やや若めのオジサマだけど渋さが良いわ！！

「き…今日はよろしくお願ひします、神楽坂明日菜です」

すると外見違わぬ声でアスマさんは言った

「そうか…じゃ明日菜って呼んで良いか？」

「ハイ！もちろん！！」

即答したわ！！

さて…デート予行の始まりよ！

疲れます！パワフル過ぎますよ神楽坂さん！

ボ口を出さない様にぶっきらぼうに言っていますが…個人的には敬

語の方が遙かに楽です！

私が乱暴な口調になるのはキレた時くらいですから…

「アスマさん！次はアツチ行きましょう！！！」

「お！おい！！まだ行くのか！？」

勘弁して下さい！

結局上手くデートは出来ましたが…疲れました
暫くこんな事は勘弁したいですね

八門遁甲の異常性（前書き）

出来ました！

感想あれば書き込んで下さい

もう少ししたら2年時の学祭を書きます

処でガマブン太はラカン表でどれくらいですかね…

7000は確実に超えてると思うんですが…皆さんの意見が聞きたいです

八門遁甲の異常性

「なんだと…」

私は思わずその言葉を漏らした

魔力は人それぞれ持てる量が決まっている

例えばジジイの孫はナギを越えるバカでかい魔力量だ

だが…リンジが今やってる事は明らかに異常だ

チャクラを全開で練っている時の量は魔力で言えば中々の量だ

だが…今修行中だと言う八門遁甲の門を開け始めた途端

「うおおおおお!!!」

今第四門、傷門まで開けているのだが…地面にヒビが入り大気が更に震えている

…忍者の忍術と魔法使いの魔法は基本は同じ…

これはリンジとのすり合わせで分かってきた物だ

杖の代わりに印や巻物を用い魔力の代わりにチャクラを使う

ただ方向性が大きく違うだけだ

平和や正義の元に発展した魔法は治癒魔法や従者が必要な事から生

まれたパクテイオー等、忍術と違い人を救い守る方向に発展した

反対に忍術は戦争や独自に開発された物らしい

人を救うためと言う側面もあるが敵をいかなる手段を用いても排

除すると言った側面が強い

結果この世界ではあり得ない変化の術に透明化の術、更に壁走り、

水面歩行等あらゆる状況に1人でも臨めるような物になっている

だが…少なくとも私はこの世界の中では最も魔法の知識が有るもの

の1人だ

今リンジがやっている物に類する物は見たことがない

潜在的能力の解放か…?

「よしっ！第五門、杜門…開!!!」

おいおい…地面の土が捲れ始めたぞ

「ハアツ……！ハアツ……！」

なんとかと言った所ですか…負担が強すぎる…これは楓に教える事は出来ませんね

よくもまあガイは第六をポンポン開けれるものです…しかも第七まで開けれるのはもはや化け物ですね

おや、エヴァが走ってきました

「リンジ！あの術はなんだ！？」

ああ…この人達は魔力だけだから経絡系を使わないから八門を知らないんですか

「八門遁甲…体内にあるチャクラの水門の役割を果たす8つの門を開ける技です…私の切り札の1つです」

「切り札？それに水門？」

エヴァは考えているようですね

「仙人モードが総合的に尚且つ長時間戦闘力を上げるのにたいして八門遁甲は身体能力を爆発的に上げます…その分リスクが高く体に負担がかかりすぎるんですよ…仙人モードも失敗すれば石になりますし…」

エヴァは素直に関心しています

恐らくこの世界には存在すらしない術ですからね

「…今お前は五門まで開けたな？八門あけたらどうなるんだ？」

……開けませんからね…

いや習得してる人は皆開けられる可能性があります…戻ってこれませんし

「八門全部を開けた状態を八門遁甲の陣と言います…発動すれば恐らくこの魔法使い全員を相手にしても瞬殺…とまではいかないかも知れませんが殺す事は可能ですね……但し八門遁甲の陣を発動す

ると体が耐えきれなくなり例外なく死に至ります、よってこれは禁術指定が掛かってます」

やはりか…あの異常性はやはり禁術の類…

しかも完全解放で死に至るだと？

魔法の常識から完全にぶっ飛んでいる

多分この世界では一種の究極技法の1つだな…

しかもこいつは強くなる事に貪欲だ

弟子…長瀬の才能がずば抜けているから努力しているし尚且つ人の死も経験しているからこそ力の扱い方を心得ているすしはこの頭の固い魔法使いどもに学んでほしいものだ

…特にグッドマンは正義を盲信している

自らが絶対に正しいと思っている節がある

少し前のタカミチとの試合だって奴が騒がなければ起こる筈も無かった

…結果的にタカミチと互角の戦闘力を持つ事が分かり…

更にその上口寄せもあるのだからリンジが反旗を翻したらジジイとタカミチが全力を出さねばリンジは止まられないだろう

だがコイツは恐らく裏切らない

その程度が見抜けなくて何が闇の福音か

だから忠告しておくか

「リンジ…出来る限りその八門遁甲は使うな…また魔法使い達が邪道だとか、我々の正義の為に教えろとか言ってくるぞ？」

リンジはハアツと溜め息を突いた

「頭の固い人達ですねえ…忍びなんだから価値観が違うのも当たり前なのに…」

…確かになあ…タカミチみたいな奴等こそ珍しいからな

リンジはフラフラしながら別荘から出ていった…私も出るか…

オマケ

何だか校内が騒がしいですね

学祭ですか…

私としては何故恐竜らしき物が歩いているのかが理解出来ません

……おや楓が走ってきましたね

「師匠…折り入って頼みがあるでござる…これに化けて欲しいでござる！」

そう言っただけで差し出されたのは…灰色の可愛い巨大な生物…

「楓…コレハ？」

楓は花咲く笑顔で言いました

「とりのトト でござる」

……貴重な学祭の1日を珍獣として過ごす事が確定した日でした…

トト (前書き)

エヴァが少し壊れてます
では感想あれば書き込んで下さい！

トト

「学園マップ販売中です〜！」

「買って置いて下さい〜！」

「今ならトトと写真撮影が出来るでござるよ〜！」
……今後悔してます

トトのDVDは風香から借りて見ました
いやぁ…ジリは面白いですね

そうやって現実逃避しても今の私は灰色の可愛い巨大なトトに化
けている訳で…

「にしても…顧問随分リアルな着ぐるみだね」
風香が頭によじ登って言います

「……暑そうですね」
史伽、これが本体だから暑くありませんよ

「顧問は色々ツテがあるでござるからなあ」
楓…しばきますよ？

何で私がこんな格好しなければならぬのか…

「」「散歩部の顧問だから(でござる)！」「」
……さいですか…

その時でした

「お…おおおお！トト だとおおお！？」

……この声は…エヴァ！？

「マスターはジリの大ファンです」

茶々丸が意外な事実を暴露しました

そう言えば…アニメのDVDが色々ありましたね

置いておいたコマの上に飛び乗り手を広げあのポーズをとってみます

『おお〜!』

回りから拍手がおきます

「……とうっ!」

エヴァが背中に飛び付きます

「ああ…モフモフだあ…幸せだなあ…」

…… エヴァがトリップしてます

貴女、真祖の吸血鬼じゃなかったんですか!?

「……もしや…ナギが言っていた光に生きるとは…この事かも知れ
んな……」

ホントに大丈夫ですか!?

エヴァ! トト にトリップする事が光に生きるとは思えませんよ!!
貴女、誇り高い吸血鬼じゃなかったのですか!?

ナギが誰かは知りませんがこんな貴女は望んでないでしょう!

「ああ…マスター…何て可愛らしい…」

茶々丸! どうにかしてください!

「………」

楓? 睨み付けないで下さい

トト になれと言ったのは貴女でしょう?

…… まさか、エヴァに焼きもちを妬いているんですか?

取り敢えず楓を招き寄せます

「……なんでござるか?」

近付いた瞬間に抱き抱えます

「うぎっ!?!」

楓は慌てていますが大人しくなりました

…… これは少し不味いかも知れませんが

楓はまごうこと無き美少女です

スタイルも気立てもよく誰から見てもいい女でしょう

もし…仮に楓が私に好意を抱いているのなら嬉しいですし、受ける
事も吝かではありません

…… しかし…年齢が問題です

DVDから完全にトレースした声を静聴あれ！

「オオオオオオ！！！」

一声吼えます

「そつくりだ！！！」

2人共拍手をくれました

チャクラにまだまだ余裕があつたので更に化けてみます

「ウニヤアアアア！！！」

そう！トト の友達…

「ネ バスだ！！！」

娘さんがいるガンドルフィーニ先生はホントにびっくりしています

「……忍者つてデタラメだな……」

ポンポン転移魔法が出来る貴方達に言われたくありません

さて…明日は誰と回りましょうかね

楽しみです

千年殺し(前書き)

出来ました！

感想あればどうぞよろしくお願いいたします！！

……千年殺しは実は恐ろしい技だと思えます

千年殺し

今日は学祭2日目になります

楓とは3日目に一緒に回る事になりました

本日の私は警備員です

ついさつきも不埒な輩を回し蹴りでしとめ引き渡しました

…どこの世界にもバカはいるもんです

「……………自重してはくれませんか」

ふうつと溜め息を付いてベンチに腰掛けます

「何やってるのでしょね…あいつらは…」

よくコンビを組んだエビスやアカデミーからお世話になったイルカ先輩、合コン連敗仲間のヤマトにリー君と一緒に鍛錬するガイに飲み仲間のイビキさん…

親しい友人の顔が思い浮かびます

いつかは…戻らなきゃいけません…戻れないなら此处で骨を埋めるのもいいかも知れません

そう…心の底から思える程暖かい場所です

それに…大事な可愛い弟子も出来ました

自分の教えた物を次代へ繋げる事が出来る事はいい物です

喫煙可の場所だったので煙草を口に加え火を着けます

空に煙りがゆらゆらと登っていきます

……ブン太の煙管に憧れて喫煙を始めましたが、頭がスッキリするのはいいですね

「んだとコラア！！」

いきなり私の寛げる癒し時間が終わりました

……何なんだ？

そっちの方へ行くと大柄な男が…誰かに絡んでいるようです

近付いてみれば…近衛さん!?

「待ちなさい、何が会ったんですか？」

2人の間に割って入ります

「あ…先生や…」

近衛さんはほっと一安心した様です

「一体何が…」

そう聞こうとした時、私は瞬時に近衛さんとしゃがみました
若干のタイムラグの後拳が通過しました

「邪魔すんじゃないやねえーよ、今俺はその子に話しかけてんの！」

……ナンパですか

「やめなさい、嫌がっているでしょう」

相手は髪が金髪で整った顔立ちをしています

イラツとした表情を浮かべ私を睨みます

私の大事な生徒を嫌がっているのによくもナンパしようと思いました
ね？

……決めました

あの技をしましょう…慈悲は要りません

肛門を押さえのたうち回りなさい……!!

「うつせんだよ、ゴラアアア!!」

再び大振りの拳が来ますが瞬時に見切り後ろに回り込みます

四肢に力を込め指を立て標的を見定め……

「喰らいなさい！千年殺し!!」

一気に解放します!!

ズブツ!!

「アーーーーーッ!!!!!!」美しい放物線を描き5m以上飛んで
いきました

学祭の間は辺りに様々なカメラが仕掛けてあり常時中継が可能とな
っている

当然さっきの千年殺しと言う名のカンチョーも公開されている訳で…

警備員待機室

「……恐ろしい……」

ガンドルフイーニ先生がぼそりと呟いた

「確かにね……」

思わず僕も肛門を押さえてしまった…

「高畑先生……あの男大丈夫でしょうか……？」

瀬流彦先生が僕に言ってくる

「分からない……ただ……肛門は……崩壊しているはずだ……」

男3人…静かに黙祷した

超包子

「アイヤー……」

もう言葉がないネ…

えげつない事この上ないヨ

「…鍛えようがないアルからな…」確かに肛門は鍛えようがないヨ…

それをあれだけの力で…想像したくないネ

……計画を若干修正すべきかな…

護衛娘

あり得なかった…

いけすかない金髪男がお嬢様に絡んでいるのを見た瞬間直ぐ様叩き
潰そうと思ひ飛び出しかけた時、リンジ先生が煙草を加えながら現
れた

龍宮の話しによれば高畑先生と互角にやりあえる猛者らしい
先生は男の拳を余裕で避けて…肛門に指を叩き込んだ
それは凄まじい破壊力を伴い男を吹き飛ばした……
……絶対にリンジ先生には逆らわない様にしよう……

リンジは広域警備員も兼ねている
タカミチのデスメガネの様にリンジにもあだ名があり、笑う紳士と
か蹴りで不埒者を叩きのめしているのでサッカーマン等と呼ばれて
いるが新たにあだ名が増えた
その名も…肛門ブレイカー……

幸いにも彼に淡い思いを抱く忍者少女は知らずにすんだ

オマケ

「いてえ……」

肛門が火が出るかと思っただぜ…何なんだよ！
チクショウ！！ナンパしたかっただけなのに！！

その時俺は肩を捕まれた

「んだよ？」

イライラして振り向いたら…

「やらないか？」

ツナギを脱ぎながら俺を路地裏へ引きずりこもつとするいい男が！

「あ…あああ…！」

力が抜けた俺はそのまま引きずりこまれ…

「アーーーーーッ！！！！！」

デート（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

あと次回の話ですが学園祭のギャグ話と高音が余計な事をしたせいでリンジの過去が先生達にバレる話のどちらがいいですか？
出来たら感想に書いてください

デート

3日目です

さて…今現在私はと言つと…

「師匠！早く行くでござるよ〜！」

デートです

ええ…女性は強いです

ホントに強い…デートが始まって直ぐに手を組んだんですが…引き摺られています

「か…：楓！ペースを落として！ぬおおお！」

お願いいたします！いやホント

学祭の間は仮装がOKでござる

つまり私服もOKでござる

なので今日はセクシーにミニスカートをはいてみたでござる

ふふふ…せつかくの2人きりのデートなんでござるからおめかしは当然でござる！

師匠は黒のジーンズに白い長袖シャツの上に青いシャツを羽織った姿でござった

…く〜く〜っ！普通の格好がやけに似合っているでござる！

「おや？珍しいですね…似合っていますよ、楓」

おめかしは正解でござるな！

さて楽しむとするでござるよ〜！

因みに…学園某所にて突然ラブ臭きたあーっ！と叫び高畑先生にたしなめられた生徒がいたそうな

木の葉演習所

「て…テンテン！？落ち着いてください！！」
模擬戦で突然テンテンが暴走し始めました！

「…………誰かがリンジさんに手を出した様な気がする…」
リンジさん？今行方不明の…ガマ達によれば異世界で頑張っている
との話でしたが…

「落ち着け！テンテ…うわあああ！！」

「ネジイイイ！！」

ネジが起爆札で火だるまに！

「ああ〜イライラするう〜！」

誰か！テンテンを止めてください！！

恋する乙女の電波は世界の壁すら越える様だ

「どうかしましたか？」

楓が突然ニコニコ笑い出しました

「いや…どこかの誰かに勝った気がするのでござるよ」

…………何処かの誰かに…？

「まあ…良いでしょう…おや…アレは？」

弓道部の出し物が出ていました

【的当て…ライフル、弓、ボール、手裏剣…】
良い所見せましょうか…

「あり得ねえ…」

糸目の美人と一緒に入ってきた男は一番難易度が高い手裏剣を選択した

これは商品は豪華だが刺さりづらいし手裏剣が重いと言う無茶苦茶なもんだ

だけど…今10個中9個当てやがった…しかも全部中心に！

だが…信じらんねえのは距離だ

手裏剣は難しいからの距離は7mだ

だが！今男は弓道の遠的位置…60mから投げてやがる
余りの非常識に言葉が出ねえ…

「これで…最後！！」

そうして男が投げた手裏剣をど真ん中に当たった…

商品…全部持ってかれた…

「まあ…当然ですね」

この程度が出来なければ上忍とは言えません

大量の食券やぬいぐるみにアクセサリ…

「はい挙げますよ、楓」

楓にぬいぐるみを渡します

「う…あ…ありがとうございます…」

頬を赤くしている楓…可愛いですね

私も楓の事は好きですからね…好きな人がはにかんでいるのは嬉しいですね

…私から言うならヒナタさんはもつと強く出るべきです

そうすればナルト君もコロツと…いかないですね

誰も彼も一途ですからねえ…

「師匠？どうしたでござるか？」

楓がこつちを見ました

やれやれ…紳士を自称するものとしてマナー違反ですね

「いやいや…楓みたいな綺麗な女の子と歩くのが楽しいんですよ？」

…気障でしたかね

「そ…そんな…照れるでござる…」

もう真つ赤に成りすぎて顔色がとんでもない事になってますね

…いえ…私も同じですか

「じゃ…もっと楽しみましょうか!?!」

「はいでござる!?!」

2人並んで意気揚々と歩き出します

…多分恋人どうしに見られますね

ま…構いません

恐らく近い内にそうなるでしょう…夏休みでしょうか…動くとしたら

「楓、夏休みに海に行きませんか?」

楓は顔をほろこばせ言いました

「ホントでござるか!?!是非行きたいでござる!?!」

いきなり大声を出さないでください!

嬉しいのは分かりますが落ち着いてください!?!

こうして…私たちのデートは無事に終わりました

楓の気持ちも分かりましたし…自分から動かなきゃ男じゃないですね

今の内に色々調べておきますか…

お爺ちゃんとの約束(前書き)

出来ました！

感想待ってます！！

次回はギャグです

お爺ちゃんとの約束

高音サイド

文化祭最終日終了後：私は 愛依と共に休んで熟睡中の森青先生の所にいた

「……お姉さま：ホントに良いんですか？」
愛依がそう私に聞いてくる

「良いのよ……先生達は納得したけど、私は先生を信用出来ない」
力ある者はその力を全てのか弱い人々を救い守る為に振るうべきの筈……

しかし……森青先生は其だけの力を持ちながら自分に関わる人を守る為に振るうと言っています

その考えは立派な魔法使いとして認める事は出来ない！
だからこそ……森青先生が何を考えているのか……どうしてそんな思考なのかを知る必要があるのです

「それじゃあ……行きますよ……」
そして愛依が記憶を覗く魔法を唱えかけた時……

「2人とも何をしてるんだ!？」

「ふえっ!？」

タカミチ先生達が突然入ってきた結果愛依の集中力が乱れて……

「お爺ちゃん!」

子供の頃の……まだ6才くらいのリンジが走っている

「おおリンジ!ちゃんと勉強やつておるか?」

白髪頭の元気な老人が走ってきたリンジを受け止めた

「うん!アカデミーは楽しいよ!」

リンジはニコニコ笑顔で笑った

「そうか、そうか！じゃあ…家に帰るとするかのう…お母さんが肉ジャガを作って待つとるぞ？」

リンジの祖父：コウボは手を引いて家へと帰る

「おー！」

リンジの両親は札作りの職人であり祖父のコウボは怪我で引退した特別上忍である

リンジは祖父から若い頃の自分や三代目、そして四代目の武勇伝を聞いて育ち忍に憧れアカデミーに通っていた

両親は札作りの名人であり何時も忙しくアカデミーへ迎えに行く時はいつもコウボが迎えに行っていた

リンジはコウボが大好きなお爺ちゃんっ子だった

「ええか？リンジ…忍とは忍道を貫く者じゃとワシは思う」

リンジは神妙に聞いている

「ワシは…途中で引退してしまったが…次代を守ると言うワシの忍道を貫く事ができた…じゃから…」

コウボはその深い皺が刻まれた掌でリンジの頭を撫でながら言った
「お前も立派な…自分だけの忍道を見つけるんじゃ、お爺ちゃんとの約束じゃ」

リンジはコウボの方を見ながら頷いた

だが…ある日悲劇が訪れる

九尾の妖狐が突如として里を襲った

その力は凄まじく歩くだけで地面が凹み、尾の一振りです住宅が薙ぎ倒される

まさしく天災であった

「お爺ちゃん！お爺ちゃん！」

コウボはリンジの泣き声で目を覚ました
体が動かない…ふと見れば自分の半身が崩れた家の下敷きになり砕
けている

…：致命傷だった

九尾の尻尾が森青家の住居を薙ぎ払ったのだ

引退したとはいえ忍のコウボは咄嗟にリンジを投げ飛ばし助けたのだ
リンジの両親は空区のコバアの元に札を届けに行った為に留守で
あり自宅には2人だけだった

「リンジ…怪我はないか…？」

「無いよ…でも、ううっ！お爺ちゃんが…」

下半身が家の下敷きになっていて助け出しても助かる傷ではない
その時1人の忍者が現れた

「中忍の森野イビキだ！…誰かいないのか！？」

リンジは必死に手を振り叫んだ

「お爺ちゃんが！お爺ちゃんを助けて！！」

イビキは瞬時にリンジの声した所に向かった
しかし…

「ボウズ…無理だ…！」

既に大量に出血しており助かる見込みも救助できる可能性もなかった

「そんな…お爺ちゃんは…助からない？…うわあああん！！」

リンジは大粒の涙をこぼした

「リンジ…よく聞きなさい」

コウボが声を出すのもツライのに絞り出す様に言った

「リンジ…：ワシはな…不思議と死ぬのが怖くない…ゴフツ…：そ
れはなお前みたいな未来ある若者を助ける…：事が出来たからじゃ
…：」

リンジは泣くのを堪え聞き入っている

「…：いつかお前に言ったな…：立派な…：忍道を見付けると…：ワシは
お前な…：ら…：出来るよ、信じると…：じゃから…：諦めるな…：何が

あつて…も自分を貫くんじゃ！…ワシの火の意思をお前に託すぞ
…」
リンジは必死に嗚咽を堪え聞いていた
「…わが…が…つだ…僕…頑張るよ…お爺ちゃん！」
その返事を聞きコウボは満足そうに頷いた
「…イビキとやら…孫を頼む…最後じゃ…リンジ…達者でな…」
リンジは何度も頷いた
其を見たイビキはリンジを抱え飛び去った…

魔法の効果が切れ高音達は現実に戻ってきた

しかし…その記憶はタカミチ達が乱入した為彼らも見ることになった
タカミチサイド

…信じられない
高音君がやった事は許される事ではない
だがそのおかげといつてはなんだけどリンジの過去が分かってしま
った

恐らく彼の見つけた忍道こそが”大切な人を護る”事なんだろう
そして…今もお爺さんとの約束を違えずに守り続けているなんて…
知らなかった

「そんな…私は…私は…」

高音君も知らずに覗いて後悔している
後悔しているならば覗かなければいい
…若い人達は自らの正義を疑わない
自分達と違う思考を悪と決め付ける

リンジが以前皆の前で語った時…その目は揺るぎない信念を感じた
…その事に気付いていたならこんな事はしなかった筈だ
僕らは高音君達を叱るべく未だぐっすりと眠るリンジを置いてソツ

と去った

「……懐かしい夢を見ていましたね……」

普段、寝ていても直ぐに起きれる様に気を張っていますがタカミチがいるからついつい緩み寝過ぎたようですね

「しかし……あの夢を見るとは……」

お爺ちゃんが私を庇って死んだ夢……

あれからアカデミーを卒業してガムシヤラに任務に励み頑張り続けました

……その中で自分の中で大切な人を死なせたくない、護って共に生きていきたい……そんな気持ちが生えていました

そして……コレこそ自分の忍道と確信したのです

お爺ちゃんとの約束……忍道は見付けました

後は何があれ自分を貫くだけです

「……お爺ちゃんの火の意思はちゃんと継ぎました……だから安心して下さい」

外にでて明るい空を見ながら呟きました

「……そして……いつか……自分なりの火の意思を託そうと思います」

お爺ちゃんがしてくれたように自分が生きた意味を人に託したいから……

……やっぱり私はお爺ちゃんっ子ですか……

そんな事を考えながら歩き出しました

今日も自らの忍道に従って……

制裁（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

本来ギャグの予定でしたが制裁を望む声があつたので制裁を行いました

ぶちギリリンジの口調におかしい所があれば教えてください

制裁

タカミチサイド

「記憶を……覗いた？」

リンジ君に高音君達が行った行為を伝えた
悪人ならともかく彼は善良な……それも信念に生きる人だ
其を覗いたのなら裁くのもリンジにある
そう思いガンドルフィーニと話した時だった

ブチィッ!!

何か凄まじい音がした

「あんのクソガキ共があ……覚悟は出来とんのか!!」
リンジがぶちギレた

それは当然だが……口調が変わりすぎじゃないか!?

「リ……リンジ？」
ガンドルフィーニが恐る恐る話し掛けた

「ああ!?! なんじゃいガンドルフィーニ!!」
とんでもない怒号が響いた

「ひあっ!!」
意外にも可愛らしい悲鳴を上げたガンドルフィーニ……

「……俺がキツチリ落とし前つけたるわ……半殺しは覚悟しとけや!
!クソガキ共おお!!」

リンジは紳士だ

しかし……その高い怒りの沸点を超えた際ブン太の口調そっくりになる
その際の戦闘力は実に5割増しとまで言われており……かつて祖父を

ダンゾウにバカにされた際、躊躇い無くぶちギレ殺しにかり止めに入ったガイと根の暗部を病院送りにする程だ

「な…なんだ？リンジ？」

エヴァは修羅もかくやと言う形相のリンジを見て驚いた

「何でもねえ…わりいが別荘貸してくれや？」

口調が変わりすぎであり、まるで本職のヤクザである

「何で必要なんだ？」

エヴァはややびくつきながらも尋ねた

「何で？…んなもん落とし前つけるために決まっところうがああ！
！」

「ひああああ！！！」

エヴァは余りの凄みに思わずひっくり返った

「で…貸すんか…貸さんのか？」

エヴァは余りの事態にコクコク頷いた

「恩に切る…さて…人の記憶を勝手に覗いた愚か者をシバキ倒してやらあに！！」エヴァは心から思った

(…コイツの記憶は覗かない様にしよう…)

さて高音達はエヴァの別荘に呼び出された

「…呼び出された訳位は分かるわな…クソガキ共」

高音達は余りに違うリンジに戸惑っている

「その…す…すいま「自分勝手の主義で人の記憶を覗くんがてめえらの正義なんか！！ああ！？言うてみいや！！」…」

リンジは謝罪も聞かず吐き捨てた

「言い返せんのか！？言い返せんなら最初からせにやあええじゃろ

うがー!! 違っんか!!」

「……………」

何も言い返せない2人
当然である

「…………今からためえらにキツチリ落とし前つけさせてもらっけんの
…魔法使えや…死ぬぞ?」

「な…それは…」

「お…お姉さま!!」

戸惑う2人だがリンジは四肢を踏ん張り力を込める

「問答…無用じゃあああ!! 八門遁甲…第四傷門…開!!」

リンジの体から爆発的なチャクラが噴き出す!!

「ネ…ネイブル・メイブルア「遅い! 木の葉壊岩升!」かふっ!」

強烈な肘打ちを叩き込まれ吹き飛んでいく愛依

「何をするんです!!」

高音がお得意の魔法…影術による使い魔がリンジを取り押さえんと
するが

「アデアット…韋駄天武!」

白き具足と手甲の力を使い空へ飛び上がり静止するリンジ

「え…そんなアーティファクトなんて!」

高音が言うのも無理はない

リンジは空中に逆さまに静止しているのだ

韋駄天武は空を飛ぶ為のアーティファクトではない

空に足場を作るアーティファクトなのだ

その結果自由自在に足場が作れる為地面に平行にたつ事すら可能な
のだ

自由自在に武器を出す訳でもなく結界も張れない

しかし使いこなせれば無限の可能性を秘めた強力なアーティファクト…それが韋駄天武！

「終いだ…朝孔雀！！」

そして上空から高音へと落下しながら朝孔雀を放つ！

結果…上空から凄まじい破壊力を秘めた炎と衝撃波が高音を襲う！

「きゃあああああ！！」

衝撃により吹き飛び炎により服が燃えて素っ裸で飛んでいく高音…

「ううう…」

「痛い…痛いよ…お姉さま…」

満身創痍の2人

「これに懲りたら…二度とすんじゃねえ…次やったら…潰すぞワレエ…」

2人にぶつけられたのは殺気…それも人を殺した経験のある者の殺気を浴びて2人はコクコク頷いて気絶した

忍程、情報を重視する者はいない

ましてやリンジは上忍の為国家機密のSランクの任務を受ける事もある

その為、記憶を覗かれた事に怒りの臨界点を超えたのだ…

「もう…これで懲りたでしょう」

別荘から出た私は2人を影分身に運ばせて歩いていきます

記憶を覗く術が無いと思いついていた私の落ち度でもありませんね…しかし…ナルト君のような人柱力の事やうちのは悲劇は知られていないのは幸いです

次は知られないように気を付けなければいけませんね…

オマケ

「ガンドルフィーニ先生？」

「な……ななな何だい？リンジ先生」

「……なんでそんなに及び腰なんですか
及び腰にもなる！」

彼女達と一番長くいるのは私なんだぞ！

……私が見た事がバレませんように……

まだ私はあんな目に合いたくないiiiiiiii！！！！

強さ資料（前書き）

前回の話して不快感を示された人には申し訳ありませんでした
今後とも精進しますので宜しくお願いいたします

今回は資料でリンジと楓のステータスをキャラブックと同じ表現で
表しています

またガマさんズはラカン表で示しました
但し独断で決めています

なのでおかしい所や強さの疑問点があれば書き込んで下さい
ではお楽しみ下さい

強さ資料

現時点での主要キャラのステータスを書いてみました

森青リンジ

忍	4	0	印	3	5
精	4	0	速	4	5
力	4	0	賢	4	0
幻	2	5	体	4	5

速さで押す上忍
年の割にステータスが高いのは一重に仙ガマ、シマのスパルタ修行
の為

長瀬楓

忍	3	0	印	2	5
精	3	0	速	4	0
力	2	5	賢	1	5
幻	3	0	体	3	5

とんでもない速さで成長しているリンジの弟子

幻術は才能があったらしくリンジは追い越されてしまった

賢さは戦闘に関するものなら3・5だが…勉強と言った知識…つまりIQも含まれる為こうなった…バカレンジャー恐るべし

フカサク、シマ

双方共に2800程度（蛙組手の戦闘力、仙術を使えば6000弱）
（この小説では仙人モードの際は自然エネルギーの制御で完全な力が発揮できていない…と言う設定です）

ガマ衛門

リンジの呼び出す腹心のガマ

二刀流の剣術使い

体長 3m

2500位

ガマケン

二股の鉄棒と杯の盾を使う不器用なガマ

リンジとはとても仲がよい

体長は約30m（推測）

だいたい5500程度

ガマブン太

現時点でのリンジの奥の手

妙木山が誇る最強の大ガマにして最強の尾獣九尾を押さえ付けたり、一尾の守鶴相手に一歩もひかない力を見せる等実戦経験も豊富

リングはこれ呼び出すには全チャクラの5割弱が必要
ナルトと違うのは正式に杯を交わしていること（急性アルコール中
毒で運ばれた）

体長は約50m（推測）

強さは9000と段違いである

参考ですが九尾の狐は18000くらいだと考えています

男3人(前書き)

出来ました！

感想あればどうぞよろしく！

ちなみにこの男3人はシリーズ化する予定です
旅行等させたい事があればリクエストしてください

男3人

「……これは……」

私は頭を抱えました

前回、記憶を覗いた事に対する制裁はいくらなんでもやり過ぎと言
う勧告をつけ給料カットと言う形で決着が着きました
勿論、2人にやり過ぎても申し訳無いと謝りました

閑話休題

今私は休日出勤して漢文のテストの採点をしているのですが……

「……バカレンジャー……恐るべし……ですね」

楓は23点しかないし……神楽坂さんはなんと14点……!

流石に不味い点数です

いや、今回のテストは難しかったと思いますよ?

文学史や論語に唐宋八大家の漢詩等、様々なジャンルから広く浅く
……時には深く掘り下げたり、応用が必要だったり……これで飄々と1
00点を取っている超さんの実力は本物ですね

しかし……意外なのは彼女も恐らくは武芸の達人だと言う事です

何と言うか……姿勢が綺麗過ぎるので重心のブレや歪みがないのです
クーフェイさんと良い勝負ですかね

他の先生を見てみると……ああバカレンジャーの所で顔がひきつって
ます

「アスナ君達は……ホントに……」

タカミチは担任ですから副担任の私より責任が重いでしょう

タカミチは煙草を吸うため空気清浄機を職員室に持ち込んでいます
タカミチは虚ろな目をしながら……煙草に火を……煙草!?

「タカミチ、それは煙草じゃないですよ……それはじゃがこです
……!」

テストの採点によるシヨツクかとんでもない物に火を着けて吸おうとしたタカミチ

……この時期の職員室はカオスです

ついさつきはガンドル（あだ名を許されました）が意気消沈していましたし…学園長が間違えて煙管で髭を焼くなど先生達が一番苦勞するのがこの時期です

「なあ…リンジ」

ガンドルが話しかけてきました

「何です…ガンドル？」

するとガンドルは疲れたように言いました

「今日私達はタカミチを含め非番だろ？」

私達は今日は夜の警備は非番の日です

勿論緊急事態があれば変わりますが…

「ええ…明日は休みですからぐっすり眠るつもりです」

そう言った時…ガンドルが笑いました

「3人で飲もう…鬱憤ばらしに」

良い案ですね、私もお酒は好きですし

「……そうしますか」

麻帆良の片隅の小さな居酒屋で男3人思い思いに酒を飲んでいます

「…何だか最近は何も働いてばかりだよ…娘が寂しがる」

ガンドルがワインとチーズを片手にこぼしました

「最近は何も働いてはよ…襲撃が多いのは…」

私も焼酎に揚げ物をつまみながら言います

「昔から仲が悪いからねえ…」

ビールを飲みつつ枝豆を口へ放り込むタカミチ

「……私の所は基本相互不干渉か同盟組んで仲良くしてるんですが

……」

2人は私が異世界出身と知っています

「君の所見たいには上手くいかないもんだよ…ビール追加！」

タカミチがジョッキでビールをおかわりします

「…っておい！リンジ！お前一升瓶空けてるじゃないか！？」

ガンドルが焦ってます

「ああ、お酒は強いんですよ…倒れたのは一回だけです」

ブン太と親分子分の契りの際バカでかい杯に度数がとて高い酒を注がれ、意識が朦朧としながらも飲み干した瞬間倒れて木の葉に逆口寄せで運ばれました

急性アルコール中毒でした

…あれは死んだかと思いました

お爺ちゃんが殴ってくれなかったらあのまま川を渡ってましたね

「そ…そうかい…あっ店員さん、カマンベール追加！」「ついでに鳥の唐揚げも！」んじゃそれも一緒に」

賑やかな時間は過ぎていきます

「ああ…食べたし飲んだし…」

タカミチがひさしぶりに満ち足りた表情で言います

「明日は日曜で私達は休みだ…」

ガンドルも休日出勤の疲れが取れたようです

「それじゃあ…もう一軒いきますか！？」

「…よつしやああ…！」

私も含めハイになった我々は3人で肩を組みつつ歩き出しました

…友人や同僚って…良いものですね…

「…しっかりしろ！ガンドル！！」

「おお〜…さしゆがは忍者…ぶんしんのじゅっ?」

「駄目だ!本格的に不味いよ!」

「きもち…わるい〜」

「ちよっ!ここで吐かないで下さい!ああもう!ガンドルの家まで
遠いな!」

「瞬動使ったら吐くだろうしね」

「私の瞬身の術もむ」オロロロロロ!」……私のスーツがああ
ああ!」

「……クリーニングしても無理だね」

酒は程々に…ガンドル弁償しなさいよ…

ウルティマホラ出場要請(前書き)

出来ました！

感想があればどうぞ！

なお夏休みの話しは近々番外編でやります

ウルティマホラ出場要請

「呼び出してすまんのうリンジ君、突然じゃが君はウルティマホラを知っておるかね？」

学園長に呼び出されていきなり言われました

「いえ…なんですか？そのウルトラ ンみたいな名前は？」

私は学園長に聞きました

最近風香達とウルトラ ンを見ていますが…あれは面白いですね

セ ンが一番カッコいいと思います

「ほ…毎年秋に行われる麻帆良名物の格闘大会じゃ…麻帆良最強を決める大会と言っても過言ではないの」

ふむ…そんなものがあるとは…しかしそんな大々的にやって魔法はバれないんでしょうか？

「そこら辺はバッチシじゃ、詠唱のある魔法は禁止じゃし…そもそも魔法使いはほとんど出んからの、大半が気の使い手じゃ」

なるほど、認識阻害の魔法と合わせればバれる確立は大きく減りますね

「で…私を呼び出した訳はなんでしょうか？」

それが気になります

「うむ、今回のエキシビションとしてタカミチ君と闘わんかね？」

確か…エキシビションと言うのはスポーツの勝敗を気にせず闘う試合でしたね、史伽に教えて貰いました

そんな試合に私が出て相手がタカミチとですか…

「…申し訳ありませんが理由をお教え願えますか？」

それが気になります

すると学園長は一枚の新聞を取り出しました

『最強の広域指導員は誰か！？』

……なんですかこれは…

『昨今、麻帆良を守る広域指導員の最強が変わり始めている、今ま

では2 - A担任にしてデスメガネの異名を取る高畑先生が断トツで恐れられていた、しかし今年新たに同じく2 - Aの副担任を勤める森青先生が有名になってきた…トリッキーな足技と手技で不良やさかいを悠々と止めており、その礼儀正しさからジェントルの異名までついた…果たしてどちらが強いのか!?我々は学園長に直談判しウルティマホラで決着をつけるよう要請するつもりだ』

沈黙して言葉が出ない私に学園長は更に追い討ちを掛けました
「その…一度は断ったんじゃが…署名を集めてきてなあ、無視出来なくなったんじゃ」

学祭の時にお祭り騒ぎが大好きな子達だと思いましたが…これ程とは…

「タカミチ君も了承しておる…やってくれんかね?」

…やれやれ…

「分かりました…やりましょう」

どうしてこうなるんですかね、まったく

「おお!師匠も出るのでござるか!?!」

楓の修業中に彼女が興奮した面持ちで言いました

そう言えばバトルマニアの兆候がありましたね

「ええ、タカミチとエキシビジョンと言う形式で戦いますよ」

瞬身や蓮華と言った技はアウトでしょうから…木の葉烈風と言った技で戦う事になるでしょう

多分向こうも咸卦法は使わないでしょうから…純粋な体術勝負でしょうね

「うちのクラスからはクーフェイが出るでござるよ」

楓が言いました

「麻帆良武道四天王…でしたか」

随分とでかい名だと思いましたが…朝、並み居る男達を吹き飛ばし

ていたのを見て納得しました

確かに四天王の名に相応しいですね

「さて…久しぶりに素手の闘いですからね…楓、模擬戦をしまし
う」

楓サイド

さて…今拙者は師匠の前に立っているでござる

師匠の構えは独特で右の掌を上に向けて軽く肘を曲げて体の前に
左手を背中に回しやや腰を落とす構えでござる

「忍術、忍具、瞬動はなしでござるな？」

確認するでござる

「構いませんよ…じゃ…始めましょう」

その構えから不自然な程の急加速！

「はああ！」

拙者はカウンター気味の正拳突きを繰り出すでござるが師匠はその
まま止まらずに避けてくるでござる！！

「甘いですよ！木の葉烈風！」

その場でしゃがみながらの高速回転足払い！

「なんのっ！」

拙者はバツク転の要領で後ろに飛び下がり避けるでござる

「今のを避けますか…上達しましたね」

ニコリと笑う師匠…今は笑わないで欲しいでござる

しかし…師匠の体術はとにかく速いのでござる

さて…どうすれば隙をつけるのでござるか…

「考え事していていいんですか？」

全身に悪寒が走った途端、腕を握られ引き倒されたでござる

「あちゃあ…でござる…」

しかも…顔が近いでござる

て…照れるでござるよ

「油断大敵ですよ、楓…」

そして手を引いて起こしてくれたでござる

「さて、帰りましょつか」

そしてゆっくりと歩き出した師匠を追い掛けたでござる

まだまだ…その背が遠いでござるなあ…

エキシビション！！（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ書き込んで下さい！

次回はハロウィーンの話です

後書きにお知らせがあります

エキシビション！！

『さあ〜始まりました！麻帆良での格闘大会！ウルティマホラ！！
今大会の最初の試合はエキシビション！！皆が見たかったバトル！
高畑先生vs森青先生だああ！！』

ワアアアアア！！と会場が盛り上ります

タカミチとエキシビションとは言え純粋な体技で勝負出来るのはありがたいですね

「一応お祭りだけど…正々堂々とやろうか！」

タカミチが構えます

「そうですね…盛り上げましょうか！！」

私も構えて…

『それでは〜試合開始！』

タカミチサイド

合図が出た瞬間リングはいきなりダッシュしその勢いのまま…！

「ダイナミック・エントリー！」

ダイナミックなフォームの跳び蹴りを放ってきた

その蹴りは僕の顔を狙っていた

だが余りに正確すぎる

『おお〜っと！森青先生の強烈な跳び蹴りを高畑先生見事に弾いた

！』

リングはそのまま距離を取らずに着地し接近してきた

僕はすかさず拳を繰り出す

居合い拳はポケットに入れた手から居合い抜きの様に拳を繰り出す
技だ

今回は余興のような物だから使わないけど…僕の拳はそれを使わなくても充分速い！！

「全く…速いですね！」

しかしリンジは両手を使い弾く

『森青先生もガードが堅い！！これはどちらが有利か！？』
さて…どうするか

楓サイド

師匠と高畑先生の体術合戦はそれは見事な物でござる
正しくウルティマホラのオープニングに相応しいでござる！！

高畑先生の体術は高速の拳で打ち抜き怯んだ所を狙っているでござる
反対に師匠は足技を中心としたヒットアンドアウェイに近い戦法で
ござる

どちらも至上の使い手…師匠に勝って欲しいでござるが…難しいで
ござるな…

「楽しいですね！全く！！」

私は踏み込んで上中下の三段蹴りを放ちますがタカミチはスウェイ
で避けます

「こういう事は久しぶりだよっと！」

タカミチの放つ拳を流し膝を叩き込みますが空いた片手に阻まれます
『オープニングなのに素晴らしい闘いだああ！！どっちも互角！
勝負は分からなくなってきたああ！！』

にしても埒が飽かないですね…ほぼ技量が同じなら決着はつきませ
んし…

しょうがないですね…名残惜しくはありますが、自らの肉体の強さ
に賭けますか！

『おっと！？森青先生がガードを解きました！！…これは一体？』
タカミチは私を見て察した様です

何時までたってもじり貧なら、手数を増やせばいいのです

つまり…

『高畑先生もガードを捨てた！？これはまさか！？』

実況の言う通り……正真正銘の殴り合いです！

「はああああ！」

「おおおおお！」

タカミチのフックが横腹に突き刺さります

……想像以上に響きます、痛いですね……

しかし私のストレートもタカミチの鳩尾に直撃しています

「……っう、やっぱラストはこうじゃないとね」

タカミチが笑います

「フツ…ク…そうですよ」

私も笑います

『こ…これはお互いにノーガードで殴り合っています！…これは凄
い！…』

タカミチのボディアッパーが水月に当たる

私のフックがレバーを打ち抜く

全身が軋みを上げて殴り合いを続けます

自分と互角の人物と戦える…それはとても嬉しい物でもありません

そして全く同時にお互いの顔面に拳がぶち当たり…私は倒れました

『……これは…ダブルノックアウト！！ダブルノックアウトです！
最強の広域指導員を決めるこの闘い！！結果は引き分けとなりました！
た！』

目が覚めた時楓が側にいました

「おおっ！目が覚めたでござるか！？」

看病してくれたのでしょいか、だとしたらありがたいです

「ええ… すつきりです、見てくれてありがとうございます」

楓の頭をクシャクシャ撫でます

「うむっ！？……」

最初奇声を上げましたが大人しくなりました

「楓、結果は？」

まあ、引き分けですかね

「…… ハフウ… っと！、はい！引き分けでござるよ！」

やっぱりですか… 強いですね、タカミチは

「私もまだまだですね… 精進しないと」

何とか引き分けですからね… 可愛い弟子の前で負ける事はプライドが許しません

私はベッドに入り鈍痛を堪えつつ今後の修行の内容を考えるのでした

エキシビジョン！！（後書き）

次回はハロウィーンの話です

千鶴に連れられ幼稚園に行きます

リンジに化けて欲しいキャラがいたら書いてください

ハロウィン！！（前書き）

出来ました！

感想があれば書き込んで下さい

アイデアは黒鷹様のアイデアを使わせていただきました

オマケに出てるキャラがやや壊れています、注意してください

番号は……風香ですね

「もしもし、風香ですか？」

電話口からハキハキとした声がしました

『うん！そうだよ、顧問にいい忘れてたけど今日3人で取り溜めしてたダ ナの再放送を見るから部活はお休みだよ！顧問はどうするの？一緒に見る？』

ウルトラ ンダ ナですか…良いですね

「分かりました、かと言って基本男子禁制ですから…私の家は…どうですか？寮監には私の方から行っておきます」

『イエッサー！！晩御飯はよろしくねえ〜！』

そう言っただけで通話は切れました

さて…寮監に電話して晩御飯を作らなければ…

「頑張れ〜！ダ ナ！！」

「そこです！！」

「ふむ…やはり彼処は肘の方が…」

「確かに蹴りよりは肘でしょうね…光線はまだですか…」

4人で晩御飯の青椒肉絲を食べて今鑑賞会をしています

……いつのまにかウ トラシリーズにはまってしまったね…木の葉には無いタイプの番組だから面白いです

……そうだ！3人なら可愛いキャラを知っているかも知れません

「3人共少し良いですか？」

そう前置きして今日千鶴さんに頼まれた事を説明します

すると3人はう〜んと悩んでから言いました

「ケロ 小隊！」

「ポツ ヤマ！」

「カー イでござる！」

言われた物を片っ端から携帯で探します

……ふむ全て中々の物ですね

「ありがとうございます、助かりました…さてお礼に冷蔵庫のプリンを食べていいですよ」

そう言った瞬間楓は瞬身の術でプリンを取りにいってました

……そう言えばプリンが大好きでしたねアナタは…

当日私は待ち合わせ場所に立っていました

すると…遠くから早歩きでやって来る何かが…いえ、あれは…ペンギン？

そして私の目の前で止まりました、それは正しく…

「ポツ ヤマ？」

「ポチャーツ！！！」

大人気のポ モンのポツ ヤマでした…
体が大きいのは多分…

「あの…森青先生ですか？」

「ポチャ、ポチャ！」

するとポツ ヤマは頷きました

「フツ…まさか声までそっくりの着ぐるみなんて…ありがとうございます」
「ございます、幼稚園へ行きましょう」

「チャーツ」

まさかホントにこんなリアルな着ぐるみを着てきてくれるなんて…
優しくしてお人好しですね森青先生は…

私は幼稚園に入りお菓子を配りながら考えていました

「チャチャーツ!?」

「うおーっポツ ヤマだ!」

「声がそっくりだ!!」

「遊んで!遊んで!」

ふと見ると子供達に囲まれててんでこ舞いの森青先生がいました

「こらこら!乱暴は駄目よ」

『はい!!』

こうしてハロウィーンは大成功を納めたのでした…

オマケ

「離せ!茶々丸!ポツ ヤマがいたんだぞ!？」

マスターが暴走しています

「しかしマスター、アレはアニメの…」

ポツ ヤマは空想の生き物の筈です

「ならば!何故アソコで走っている!？」

それは…分かりません

「フハハハハ!待っているポツ ヤマ!この闇の福音がゲット

してくれる!!」

ああ…超さん何故マスターにポ モンを貸したのですか…？

暫くして千鶴との会話からリンジ先生が化けた物だと分かりマスタ

ーはガツクリしています

「ううう…何故私はヒ ザルを選んだんだ…」

マスター、ヒ ザルも可愛いですよ？

新技アンケート！（前書き）

今回はアンケートです

今後の見せ場に影響してくるので御協力お願い申し上げます

新技アンケート！

作者のエルグラです

忍びの麻帆良生活をご覧いただきありがとうございます

今回は新技アンケートと題しまして…学祭または修学旅行までに、リンジに新技を覚えさせようと思います
決まった場合、話の間にリンジの修行話が入ってきます
次の中から選んで下されば幸いです

? 螺旋丸の習得 (ナルトの指示をガマが伝える形での習得)

? クナイに転移の術式を描いて簡易飛雷針の術

? 忍術応用の闇の魔法モドキ

? その他 (これの場合は皆さんが考えられた忍術、体術を使います)
? についての補足ですがリンジは雷系統は使えないのでご了承下さい

いよいよ日常も終わりに近付きネギとの邂逅が迫ってきました

ナルトと言つネギとは正反対の昔…人から嫌われていた英雄を知る
リンジがネギにどう接するのか

引き続きお楽しみ頂けたら幸いです

以上エルグラでした

それぞれの世界の英雄（前書き）

出来ました！

感想があればどうぞ！

後書きにお知らせがあります

それぞれの世界の英雄

ある日、私はエヴァの別荘で修行していました
しかし…エヴァはやはり的確ですね

魔力をチャクラに置き換えて効率の良い練り方と放出の仕方を教えてくれました

私はチャクラをどうも無駄に使っていたらしく…エヴァの指導のお陰で随分上達しました

代わりの対価として起爆札や血を上げています

起爆札はかなりの威力の割に魔力を少し流すだけで起爆が可能なので便利らしいです

元々札職人の一族ですからこれくらいは朝飯前ですね

血に関してですが、私の血はチャクラの性質上か知りませんがズッシリしていながらもキレがある…つまりたまに飲みたくなる上手い血らしいです

閑話休題

私は以前より聞きたかった事があるので
それを尋ねて見ることにしました

「エヴァ、学祭の時にナギ…とか言う人物に光に生きると言われた事を私の背中で言っていましたよね？」

するとエヴァはやや嫌そうに言いました

「ああ…そう言えば話してなかったな」

そしてエヴァは語りました

「アイツは以前起きた大戦の英雄だ…紅き翼と言うグループを率いて終結させた」

大戦を終結！？どんな力を持っているんですか！

「そして…バカだ」

は？バカですって？

「リンジ、お前が覚えている忍術はどれくらいある？」

頭の中で記憶をザーツと回想してみます

「よく使う忍術で25…覚えてるだけで使わないものも含めると…
100近くは確実にいくでしょうね」

ひよっとすると越えてるかも知れません

「アイツはな…ソラで言える呪文が3つくらいしかない」

「はああ！？ドンだけバカなんですか！？」

ナルト君もハーレムの術含め10以上あるのに…

「その代わり魔力量やコントロールがずば抜けていたがな」何なん
ですか…その滅茶苦茶な英雄は！？」

三代目はこの世に知らぬ忍術無しと謳われた程なのに…

「そして…私に登校地獄を掛けたまま居なくなってしまった…」

エヴァの声に悲しみが混じりましたが…登校地獄？

「………何です？随分ネーミングセンスが悪いですが…」

エヴァがややキレ気味に叫びました

「強制的に学校に通わなければならぬ呪いだよ！私はもう15年
も学生をやっているんだ！！しかも魔力も封じられて…」

………はて？妙ですね…

「エヴァ？その呪いは学校に強制的に通わせるんですね」

エヴァは憮然と頷きました

やはり…これは恐らく

「エヴァ…推測ですが、貴女の魔力減衰と登校地獄は多分関係無い
です」

「は？」

エヴァがビククリしていますが続けます

「ナギとやらが掛けたのはあくまで学校に強制的に行かせることで
しょう？………つまり貴女がどのような状態で行かせるかが全くの不
明です、それなら貴女の魔力がそのままでもおかしくない…しかし
魔力は減っている、つまりナギの魔法は学校に行かせるだけで…貴

女の魔力を封じているのは別の物ではないですか？」エヴァは黙って聞いた後に言いました

「……それは考えた事がないな、リンジ感謝する」

「これでも上忍ですからね……まあ推測ですが」

エヴァも確かにと頷きました

「お前の所の英雄はどんな奴だ？」

聞き返してきました

「そうですね……四代目火影に三代目火影……ああ火影はここで言う棟梁みたいな物です……そしてうずまきナルト……でしょうか」

エヴァは興味深そうにしています

「三代目火影は……この世に知らぬ忍術無しと謳われ……誰よりも民に愛された存在でした……私は幼い頃大好きだった祖父を亡くしました、三代目は祖父を覚えていて何かと優しかったです……その優しさ故に禁忌を犯した弟子を殺す事が出来ず……命と引き換えに里を守りました」

木の葉崩しは……忘れる事は出来ません

何人もの友が死んでいきました

「優しさ故に……か」

エヴァも考える所があるようです

「四代目火影は若くして長となった人です……あまり覚えていませんが太陽のような人でしたね……しかし九尾の狐……巨大な化け物が里を襲いそれをナルト君に封じ込めてこの世を去りました」

エヴァは凄く複雑な顔をしています

「最後のナルト君ですが……幼い頃より里を壊滅に追い込んだ九尾を身に宿す事から迫害され続けました……しかし諦める事無くただ前を向いて幾度と無く里の危機を救ったのです」

そこまで言ってエヴァは言いました

「リンジ……美化はしてないよな？」

「失礼ですね、事実を言ったままでですよ？」

するとやっぱり複雑そうな顔で言いました

「いや…ナギは美化されまくってるからな…どうしても…」

ああ…確かに疑いたくなりますね

しかしエヴァに光に生きろ…ですか

確かにそうかもしれないですね、憎まれ口を叩いても根と情は深いですし

「む…何をクスクス笑っている？」

「いえいえ、何もありませんよ？」

それから暫くとりとめのない話をしました

まもなく怒濤の嵐に巻き込まれるとは知らずに…

それぞれの世界の英雄（後書き）

アンケートの結果、闇の魔法モドキ…つまり闇の忍術に決定しました！

冬休みや春休み編で修行の話が入ると思います

今の所ですが

？風遁・圧害

？土遁・土矛

？火遁・豪龍火の術

のどれかを計画しています

意見等ありましたら書き込んでください

また？として螺旋丸を取り込むと言った意見もあったのでお願いします

新技・闇遁習得への道その1（前書き）

出来ました！

結構難産でした…

後書きに結構重要なオマケがあります

新技・闇遁習得への道その1

今、リンジは別荘で瞑想している

しかし…瞑想するには静かな場所が良いとはいえ…私の城の天辺に板を載つけてやるものか？しかし…あそこまで無我に至れるのは凄いな

心を静かに静めます

瞑想は仙人モードの修行を初めてから趣味になっています

しかし…ここは妙木山とまではいきませんが凄まじいまでに自然エネルギーが溢れています

楓にも教えたいのですがね…蛙を見ただけで気絶するのですから、ナルト君の様な完全版仙人モードにならない限りは蛙っぽくなりますし、仙人モードの影分身を待機できなければ蛙と合体する羽目になりますからね

私は融和性が高過ぎて蛙の化物になってきますが

「マスター」

茶々丸が何故か困惑しながら言ってきた

「どうした？」

すると茶々丸は信じられないような事を言ってきた

「リンジ先生ですが…大気中にある植物等が持つ特殊な生命エネルギーを大量に吸収し体内に取り込んでいます」

…何だと？

外界のエネルギーを吸収し体内に取り込んでいる！？

バカな…それは丸で私の…

「マスターの闇の魔法に近いですが…あくまで術ではなく、そのも

とを摂取しています」

…… 八八ハツ！！

驚かしてくれるじゃないかリンジ！！

其でこそ私の従者だ

…… アイツが帰れなくなったら私の眷属にしてやるっ

うむ… 其がいい

「茶々丸… アイツにヒントを出せ」

茶々丸は困惑したように言った

「それは何故ですか？ 闇の魔法を教えるならマスターの方が…」

確かに最もだ

「茶々丸… お前の言うことは正しい… だがな相手が魔法使いならだ」
首を傾げる茶々丸に更に告げる

「リンジのような忍者は体自身が一つの杖だ… だが発動する際のプロセスが異なる… つまり私達のやり方ではアイツには合わない可能性がある」

闇の魔法に必要なのは強い精神と肉体
リンジはそのどちらもクリアしている

特に精神は血を血で洗うような修羅場も抜けているのだから相等な物だ

肉体に関しても八門遁甲と言う馬鹿げた肉体教化技に耐えきれないのでから問題はない

問題になるのは精霊の力を借りたり己の精神力で行使する魔法に対して忍術は源泉となる精神力に身体エネルギー… つまり原始的な気を混ぜて発動する物だ

こうなると忍術と魔法は似て非なる物だ

発動の仕方こそ似ているが構成物は丸で別物

私の知識では余計になる可能性がある

しかし忍術自体はリンジは知り尽くしている

だからこそ発動の理論を与えリンジにアレンジしてもらうのが一番
確実だ

勿論私も協力するがな

「分かりました、では伝えてきます」

茶々丸は走っていった

私の闇の魔法と異世界の術が合わさった時どんなものが生まれるのか…楽しみだな

「……なるほど」

私の出したヒントに頷いたリンジ先生は直ぐ様マスターに概要やコツを聞いています

まるで玩具を与えられた子供の様です

私が出したヒントは忍術を取り込めたら面白いですねと言うだけだったのですが…リンジ先生の洞察力を甘く見ていました

「普段の貴女は進んで面白い…等は言わないんですよ…そんな茶々丸が急に言い出したとすれば、エヴァの差し金ですか」あつという間に自己完結して聞きに言っしまいました

マスターは驚きながらも説明しています

……何処と無く楽しそうです

「……以上が概要だ」

リンジは考え込みつつブツブツ言っている

「……取り込む際には…やはり…形態変化……」

……何か怖いぞ

「よし…まずは風遁を取り込めるような形態変化から始めますか！」

リンジはおもむろに立ち上がった

顔はやる気に満ちている

むしろ楽しんでるようだな

「……そうだ…エヴァ…術の名前を考えてくれませんか？」

リンジがいきなり言ってきた

「……術の名前か？出来てもいないのに？」

私が聞き返したらリンジは事もなく言った

「名前があればやる気が出ますし、壁は高ければ高いほど燃える物です…それに」

リンジが言葉を切り言った

「私はエヴァ…最強の魔法使いの従者ですよ？……出来ない筈がありません」

何を言ってるんです？と言う風なリンジ

「ククク…ハハハハハッ！…そうだな、お前は最強たるこの闇の福音の従者だ！出来ない筈がない！！」

コイツ…ますます眷属にしたくなっただぞ

さて…名前か

闇の魔法の理論で風遁を取り込むのか

「闇遁・風天大壮と言うのはどうだ？」

何の風遁術を取り込むかは知らないが…風を鎧の様に纏うだろうか
らこれでいいだろう

「うん…素晴らしい名です」リンジも気に入った様だ

さて…どんなものが出来るかな

新技・闇遁習得への道その1（後書き）

結構重要なオマケ

「ハアハアハア…逃げ切れたんかな…」

男が一人息を切らしながら町の路地に隠れた

関西呪術協会：彼はそこの術者だ

幾つもの式神による連携攻撃が自慢だ

ここに潜入したのは愛する恋人の計画に協力し近衛の孫娘を浚った
めだった

しかしその自慢の式神を3mもの蛙が刀で薙ぎ払い、忍者が札で爆
殺し、メガネがぶつ飛ばすと言う地獄絵図

彼は虎の子の転移札を使い命からがら逃げ延びたのだ

そして油断していたのだろう…背後にイイ男が近付いているのに気
が付かなかった…

「ガチ・デモ・ノンケ・デモ・クツチマウゼ！！風の精霊11人、

縛鎖となりて敵を捕まえろ、魔法の射手・戒めの風矢！」

背後から魔法が直撃した！

「これは…拘束魔法やと！？」

彼は焦り背後を見た

そして見た！

杖を片手にツナギを脱ぎながら迫るイイ男を！

「やらないか？」

彼は顔面蒼白になった

そして焦った、何故なら彼は恋人がいる身だから！

「やめる…やめるっちゅうとんじゃ！！」

しかし男は止まらない！

「安心しろ…頂いたら逃がすからな…」

「アーーーーーッ！！」

数日後：約束通り逃がされた彼は京都の恋人の家に向かった

「大丈夫！？心配したんやで虎！」

男：永嶋虎三はケツを押さえながら言った

「千草：俺：汚されてしもつた：」

虎三から話を聞いた千草は涙ながらに虎三を抱き締め西洋魔法使いへの復讐を2人でより強固に決意したのだった

このタカミチの同級生にして元魔法生徒の変態アベが行った事が修学旅行でリンジが苦勞する原因となるのはまだ先の事

リンジがいるとバランスが崩れてしまう可能性があるなので敵方に新キャラを出しました

もうまもなく原作突入ですからちょうどいいタイミングかな

一学期終了（前書き）

時間が少し飛んで二学期終了です
一応、第一部終了…と言う形です
感想があればどうぞ！

一学期終了

「は？……担任が変わる？タカミチがですか？」

今日は二学期の終業式

終わった後に学園長室に来たらコレですか！？

「うむ…実はの三学期からイギリスより教育実習の先生が来るのじゃ」

イギリス…この世界の大国の一つですね

「その子は魔法使いになる為の試練として日本で教師をする事になったのじゃ」

試練ですか…私達の昇進試験の様な感じでしょうかね

「分かりました…でどの様な人なんです？」

サポートするにしてもどんな人が知らなければ出来ませんしね

忍者にしる、何にしる情報は力です

「うむ、一言で言うなら天才児じゃろうな」

…天才児？

「……ちなみに年齢はどれくらいですか？」まあ中忍試験に通った時のカカシさんやイタチより若いって事は無いでしょうか…

私は13で中忍になりましたがね

「……数えて10じゃな」

……それは…色々と問題があるんじゃないんですか！？

「リンジ君には引き続き副担任をやってもらいたい…何故ならば君が忍びじゃからじゃ」

私が忍びだから？

「どういう事でしょうか？」

すると学園長はニヤリと笑いました

「やって来る子はネギ・スプリングフィールドと言うんじやが…この世界の英雄の息子なんじや、彼にワシ等は魔法使いとしての技術や知恵しか教えてやれん…君の持つ力はネギ君の為となるじゃろう

……腕もたつしの」

ふむ…大体は分かりました

「要は魔法使いと接するだけでは得られない知識や技術を私からネギ君とやらに吸収して欲しいんですね…分かりました」

違ったタイプを見せる事でネギ君の視野を広くしたいんですね

ま…構いませんが

「分かりました…では用があるので失礼します」

瞬身の術を使い退室しました

「なあ…タカミチ君」

言いたい事は分かりますよ学園長…あの術は凄い

「ええ…瞬動術や縮地の発展系なんでしょうね」

移動距離はかなり長くオマケに予備動作がかなり短い

「アレを見ると忍者と言う気がするの」

「確かに…アレはそう思えます」

立ち去った後こんな会話があったそうなの

「はあああ〜でござる」

また勝てなかつたでござる…

「何を溜め息を着いているんだ？」

真名殿が話し掛けてきたでござる

「……師匠に一回も勝てないでござる…」

一撃は重さがある…それは男性だから当然でござる

拙者を遥かに凌駕するスピードに体術、忍術、忍具の連携…まだまだ背中が遠いでござるよ

「ふむ……」

真名殿は深く考えて言った

「誰しもがいきなり師に勝てる事はないからな、まあめげるな」

……そうでござるな

「よしっ！今日こそ一本取るでござる！」

覚悟するでござるよ師匠！

「おや…随分気合が入ってますね」

全身からやる気が満ちています

「そうでござるな…今日こそ一本取るでござるよ！」

ふふ、一本取ると来ましたか

「やる気は買いますが…そう簡単に行きますか？…今日は何でもアリです…全力で来なさい！」

ほぼ同時にクナイと手裏剣がぶつかり合いました

「これは…」

仕事が終わった後高倍率の双眼鏡でコツソリ覗いてみたが…まるで風だ

高畑先生が広範囲を一気に凧ぎ払うなら森青先生は疾風が如く動き確実に仕留めていくのだろう

「暇だから来てみたが…見応えがあるな」

さて、じっくり見てみるとしよう

「はああっ！」

拙者の大型手裏剣が師匠のナツクルに受け止められ…流された！？

「気をつけなさいよっと！」

拙者の近くをナツクルが通過していくでござるが…わざと外した様に見えるでござる？…まさか！？

瞬時に片手を上げ横に跳ぶ…と同時に蹴りが直撃したでござる

「よく間に合いました…成長している様でなにより…」

ナツクルは囀でそのまま体を回転させてのハイキックが本命でござったか…

しかし…ここが師匠足る所以でござるか…虚実の入れ方が上手いでござる

危うく騙されるところでござった

今度はこっちの番でござる！

「風遁手裏剣一の型！列！！」

新技でござる…どうでござるかな？

これはマズイですね…！

風のチャクラを込めた手裏剣を一系列になるように連続に投げる

すると最初の手裏剣と後の手裏剣達が共鳴し貫通力が増す上に速い！！

「くっ…」

横に跳ねる様に避けた瞬間

「二の型、横列！！」

なっ…横への拡散型！？

全く…成長が速いですね

ですが…まだ甘いです…！！

確かに体が泳いでいる時の攻撃は避けられません

そう…一人なら

「なんとっ…」

信じられないでござる…

師匠は影分身を出現させ自らを引っ張り見事に避けたのでござる！
そんな使い方があったとは…

「構成、新技の使い方…合格点ですね、楓お見事です」

師匠は服をパンパンと払い言ったでござる

「さて…実力もついてきましたし、今日はお見事でしたからね、私の負け…」と言う事にしておきましょう」

……へ？

「この感触を忘れないように！…今度から高等忍術を教えます、精進するように！」

勝った？……ジワジワ来たでござる

「やったでござるよーっ！」

オマケに褒められて…嬉しすぎてござる！

「はいはい…はしゃぐのは止めて落ち着きなさい」

む…興奮してしまったでござる

師匠は帰り支度を始めたので慌てて拙者も行く

少しは追い付けたでござるかな？

全く…少しヒヤッとしましたね

ここまで成長がはやいとは…驚きです

まあ、師匠としては嬉しくもあり、同じ忍者としては羨ましかったり…

新学期から前途多難の様かも知れませんが…乗り越えていきますか！

一学期終了（後書き）

次回はネギと出会う所からスタートです

ひよっとしたら図書館島は少しストーリーが変わるかも知れませんが

（ゴーレムがケンさんになるかも）

ネギ君そして裏の事（前書き）

出来ました！

今回はバトルがないと言う事とリンジの忍術以外の技が見たいと言う意見があったのでやってみました
どうでしょうか？

ネギ君そして裏の事

「……そうじゃ、君と一緒に授業をしてもらう副担任を紹介するぞ……安心してさい魔法はしっておるからの」

学園長がそう言った時だった

するといつの間にか1人の男の人が立っていた

「こんにちわ、ネギ君…私は森青リンジと言います」

優しそうな人だけど…今のは？

「こちらこそよろしくお願いたします！…あのさっきのは？」

するとリンジ先生は朗らかに言いました

「ああ、私は忍者ですから」

……忍者！？

「忍者！…あの、東洋の神秘と言われる忍者なんですか！」

リンジ先生はやや驚きながらも言ってくれました

「え…ええ、その解釈でいいですよ」

感激だ…日本の神秘に直ぐに会えるなんて

「取り合えず…行きましようか」

さて教室に向かいネギ君が入った時…黒板消しが落ちてきました
しまった…忠告を忘れてました

そして掴もうとした時、空中で黒板消しが止まりました

障壁！？いきなり張ったら駄目でしょう！？

しかし一瞬だけ止まってそのまま落ちていきました

どうやら解除したようです

安心……出来ない！！

「ネギ君！止まっ「うわあああ！！」間に合いませんでしたか…」

縄に引つ掛かり玩具の矢で撃たれタライが落ちて…ああ酷いことに

「ネギ君！大丈夫ですか？」

私が問いかけるとネギ君はふらつきながらも頷きました

しかし…この子達のバイタリティーを忘れていました
ネギ君が自己紹介をした途端教室のテンションが跳ね上がりました
ネギ君タジタジです
ま…直ぐになれますよ

しかし…私の携帯が震えてメールが来た途端私は表情が強ばりました

送信者 近衛学園長

題名 緊急

授業終了後速やかに来られたし

何があったのか？

授業終了後ネギ君に断りを入れ学園長室に向かいます

たどり着く途中ガンドルが険しい顔をして走っていました

「リンジ、君もか？」

という事は…

「私事です、厄介事でしょうかね」

2人して慌てて駆け込みます

「来てくれたかの…すまんが厄介事じゃ、タカミチは別件で動けん
のでな、単刀直入に言わせてもらう、西の過激派の一部がネギ君を
嗅ぎ付け行動しはじめよつた、西の長からも要請が出た…動き出す
前に捕らえてくれ、場所はこことここじゃ」

1つは今夜にでも突入出来ませんが、もう1つは県外ですね

「と…言うことは出張ですか？」

ガンドルが訪ねた

「そうじゃ、すまんが学園の防衛と向こうの規模を考えると君達が
適任なんじゃ」

やれやれ…まあ手段としては間違っていないですね

就任直後なら紛れ込めば誰かも分からず浚う事は可能でしょう
させませんがね

「分かりました、では動かせて貰います」

私とガンドルは踵を返し準備に取り掛かるべく学園長室を後にしました

夜

西側のアジトの前にたどり着きました

明日は出張の名目でもう一件襲撃しなければならないので…早めに終らせますか

「では…いくぞリンジ！」

ガンドルの合図で踏み込みました

「ちいっ！感づかれたか！！！」

1人の男が札を抜きながら叫びます…させませんが！！

「木の葉…烈掌！！！」

この世界に来て作り出した物です

この世界独特の気を応用したものです

具体的にはチャクラの身体エネルギーの割合を増やすことにより気の性質…爆発的な身体強化を模倣した物です

「グボオ！！！」

腹に掌底が突き刺さり吹っ飛んでいきました

「遅いっ！！！」

ガンドルも拳銃を撃ち無力化させていきます

「木の葉槍風！」

また奥に行く途中に敵がいたので二連の前蹴りを叩き込んで眠らせます

するとガンドルがやって来ました

「リンジ、主要な敵は粗方倒したが…肝心のリーダーがいない」となるリーダーは別のアジトの方ですか

「では…明日中に片をつけましょうか」

色々と試したい技もあることですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9587m/>

忍びの麻帆良生活

2010年11月1日20時14分発行